

# 第5部 子供の健康と自己肯定感

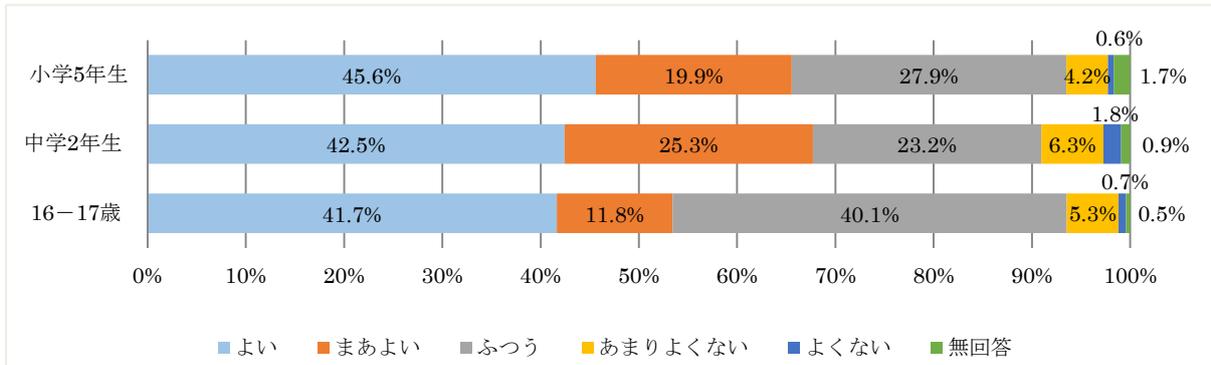
## 1 健康

### (1) 健康状態

#### ①子供の主観的健康状態

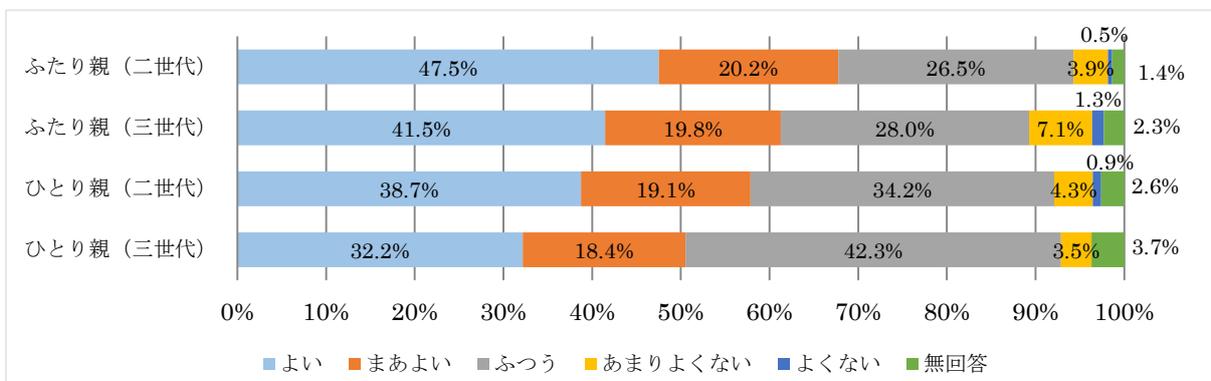
子供に、自分自身の健康状態について、5段階（「よい」、「まあよい」、「ふつう」、「あまりよくない」、「よくない」）の選択肢で聞いた。小学5年生の45.6%、中学2年生の42.5%、16-17歳の41.7%は、自分の健康状態が「よい」と答えている。健康状態が「よい」と「まあよい」を合わせると、小学5年生と中学2年生では6割を超え、16-17歳では5割を超える。しかし、小学5年生の4.2%、中学2年生の6.3%、16-17歳の5.3%が「あまりよくない」と答え、小学5年生の0.6%、中学2年生の1.8%、16-17歳の0.7%が「よくない」と答えている。

図表 5-1-1 自分の健康状態:年齢層別

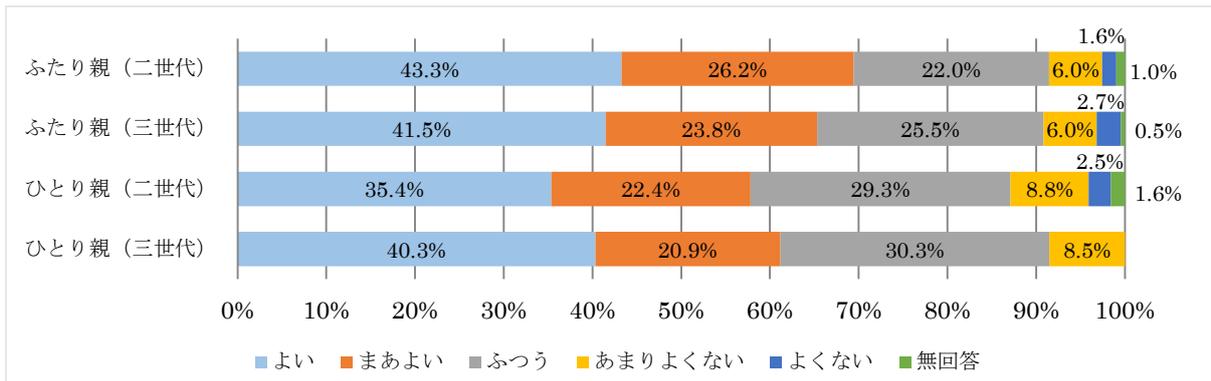


世帯タイプ別に見ると、小学5年生では、ひとり親（三世代）世帯の子供が「よい」、「まあよい」と答える割合が低かった。また、中学2年生では、ひとり親（二世代）世帯の子供が「よい」と答える割合が、他の世帯タイプに比べて低かった。

図表 5-1-2 自分の健康状態(小学5年生):世帯タイプ別(\*\*\*)

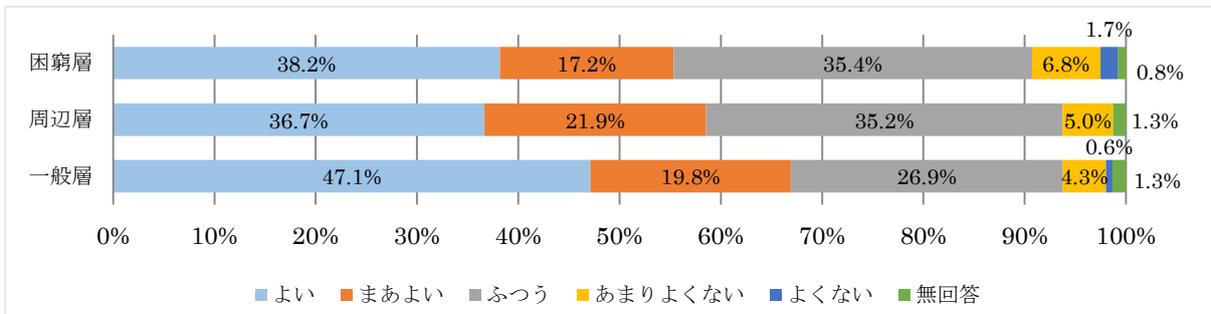


図表 5-1-3 自分の健康状態(中学 2 年生):世帯タイプ別(\*\*)

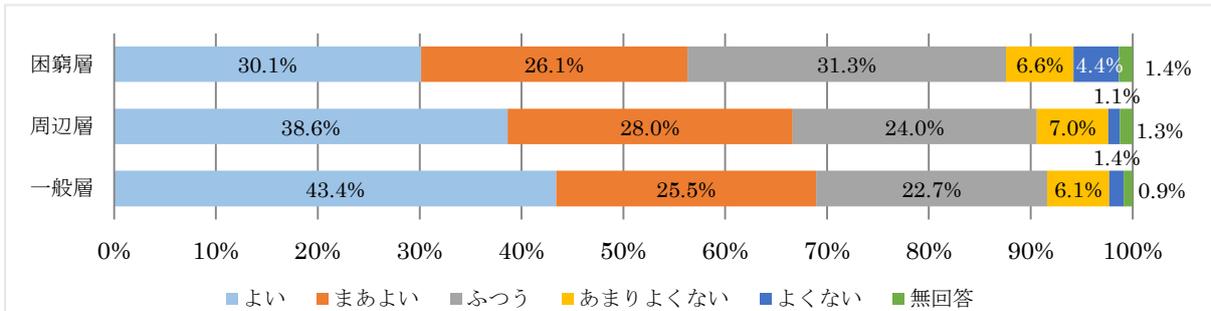


また、生活困難度別に見ると、困窮層で健康状態が「あまりよくない」、「よくない」と答える割合が高く、小学 5 年生で 8.5%、中学 2 年生で 11.0%、16-17 歳で 10.9%となっている。

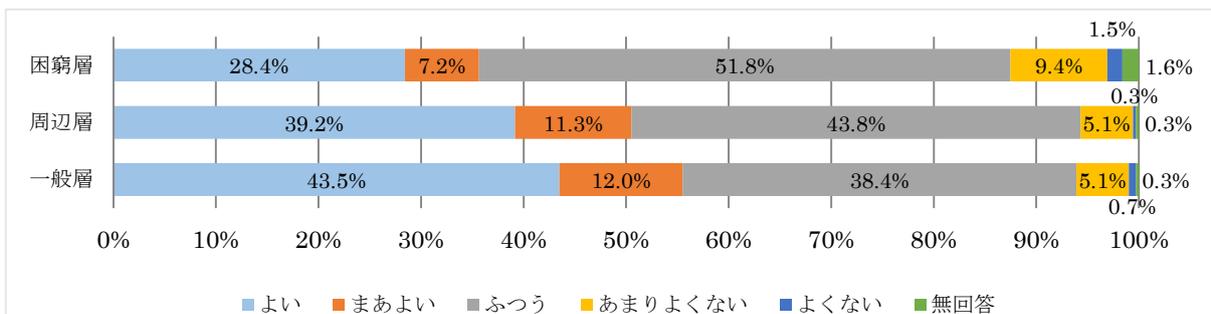
図表 5-1-4 自分の健康状態(小学 5 年生):生活困難度別(\*\*\*)



図表 5-1-5 自分の健康状態(中学 2 年生):生活困難度別(\*\*\*)



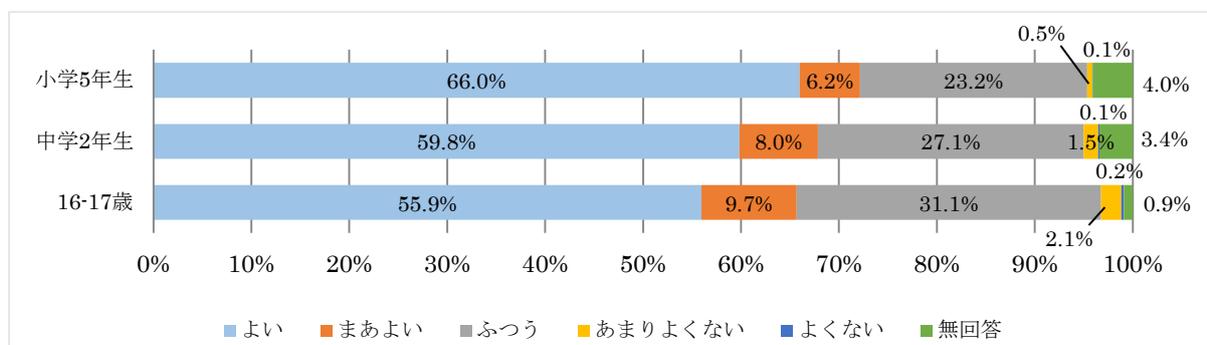
図表 5-1-6 自分の健康状態(16-17 歳):生活困難度別(\*\*\*)



## ②保護者からみた子供の健康状態

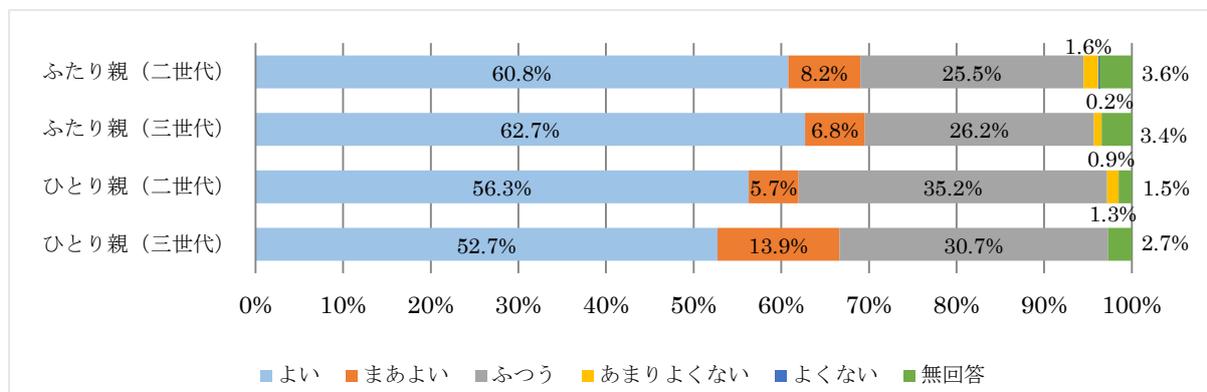
保護者に子供の健康状態を聞いた。どの年齢層においても「よい」と回答した割合が過半数を超えている一方で、子供の健康状態が「あまりよくない」、「よくない」と回答した保護者は、小学5年生で0.6%、中学2年生で1.6%、16-17歳で2.3%であった。

図表 5-1-7 保護者からみた子供の健康状態：年齢層別

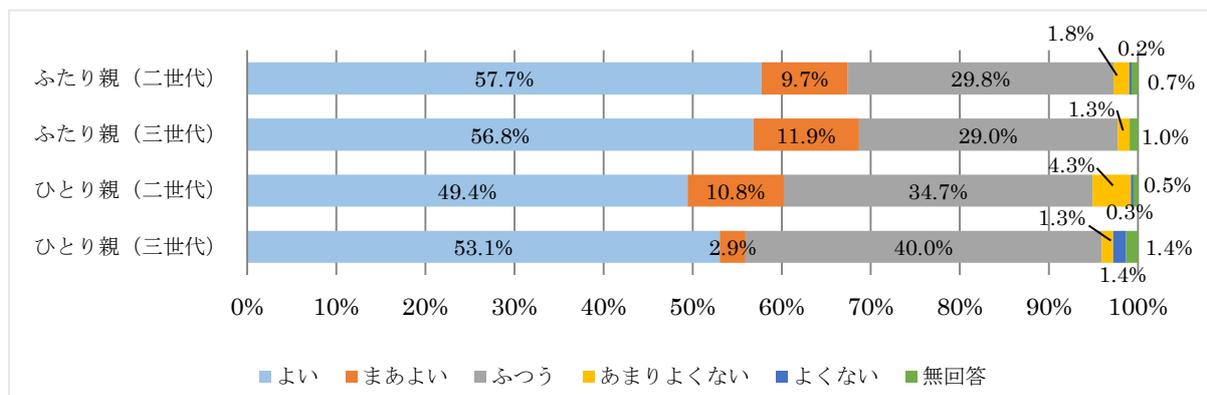


世帯タイプ別では、小学5年生の保護者回答では統計的に有意な差は見られないものの、中学2年生と16-17歳の保護者回答で統計的に有意な差が見られた。子供の健康状態が「よい」と回答した保護者の割合は、中学2年生ではひとり親（三世代）世帯、16-17歳ではひとり親（二世代）世帯が最も低かった。

図表 5-1-8 保護者からみた子供の健康状態(中学2年生)：世帯タイプ別(\*\*)

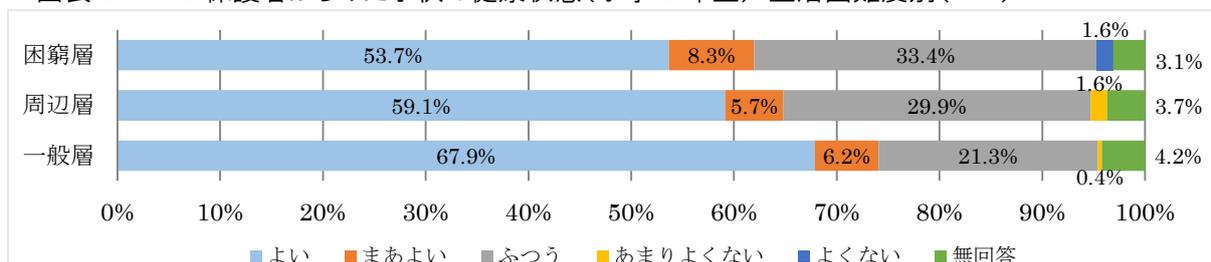


図表 5-1-9 保護者からみた子供の健康状態(16-17歳)：世帯タイプ別(\*\*\*)

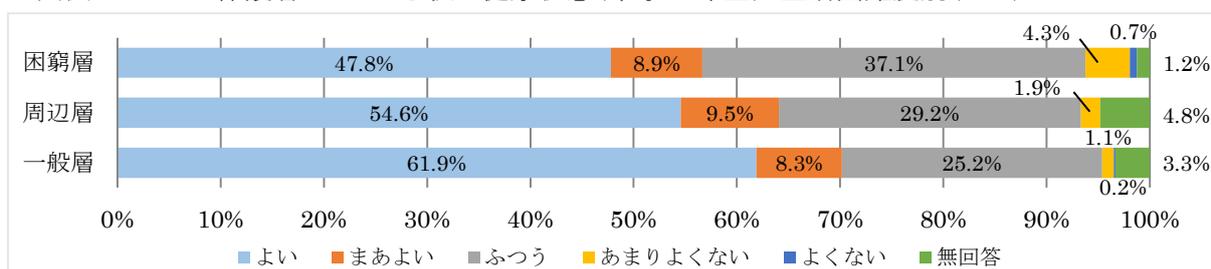


生活困難度別では、どの年齢層においても困窮層で「よい」と答えた保護者の割合が最も低い。

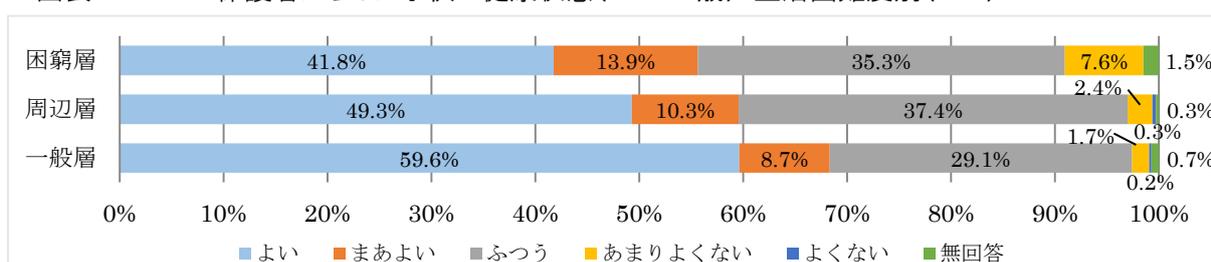
図表 5-1-10 保護者からみた子供の健康状態(小学5年生):生活困難度別(\*\*\*)



図表 5-1-11 保護者からみた子供の健康状態(中学2年生):生活困難度別(\*\*\*)



図表 5-1-12 保護者からみた子供の健康状態(16-17歳):生活困難度別(\*\*\*)

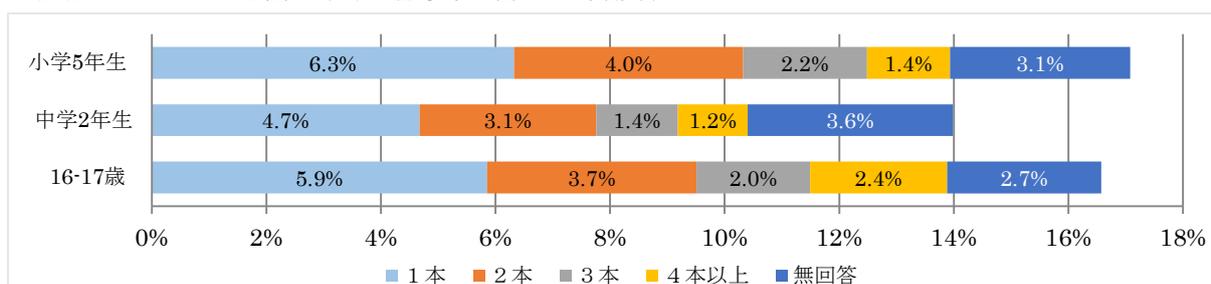


### ③むし歯の本数

子供にむし歯の本数(治療中も含む)を聞いた。図表 5-1-13 から図表 5-1-18 までは、むし歯の本数のうち、「0本」と回答した割合を除いて集計したものである。

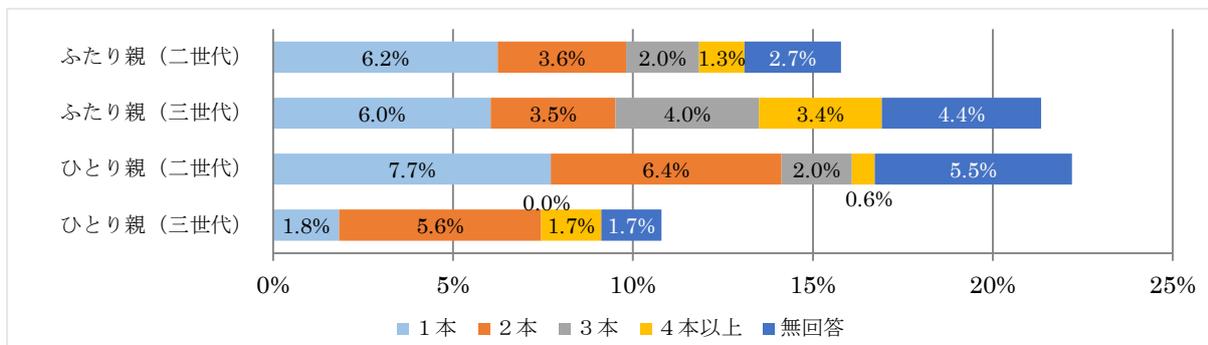
むし歯が「4本以上」の子供は、小学5年生で1.4%、中学2年生で1.2%、16-17歳で2.4%であり、小学5年生、中学2年生と比較して、16-17歳で「4本以上」と回答する割合が高い。

図表 5-1-13 むし歯の本数(治療中も含む):年齢層別

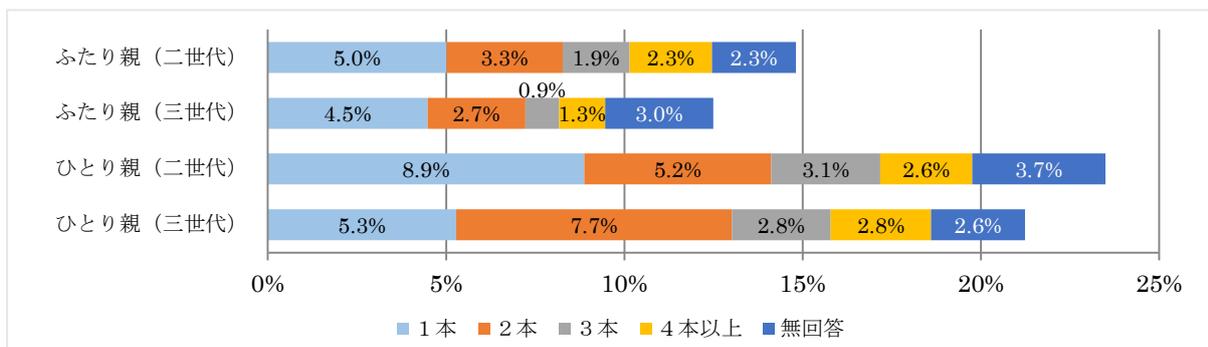


世帯タイプ別で見ると、中学2年生では統計的に有意な差は見られなかったが、小学5年生ではむし歯が「4本以上」と答えた割合は、ふたり親（三世代）世帯で最も高く、16-17歳ではひとり親（三世代）世帯で最も高かった。

図表 5-1-14 むし歯の本数(治療中も含む)(小学5年生):世帯タイプ別(\*\*)

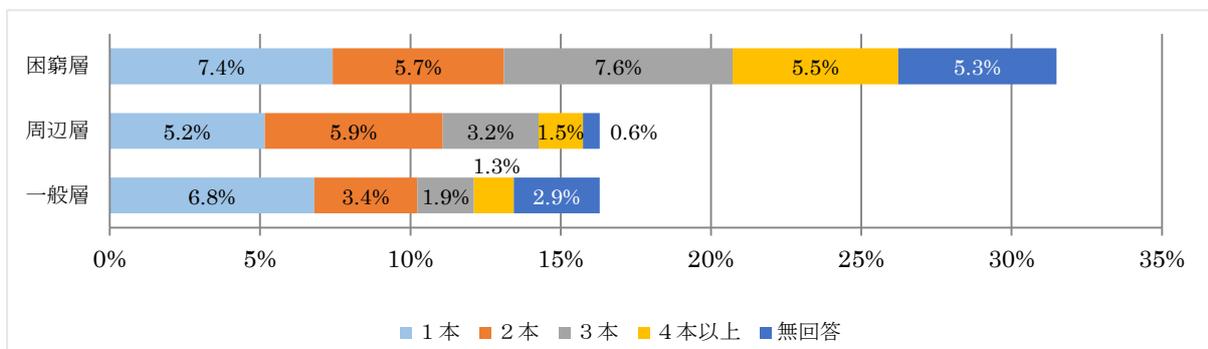


図表 5-1-15 むし歯の本数(治療中も含む)(16-17歳):世帯タイプ別(\*\*)

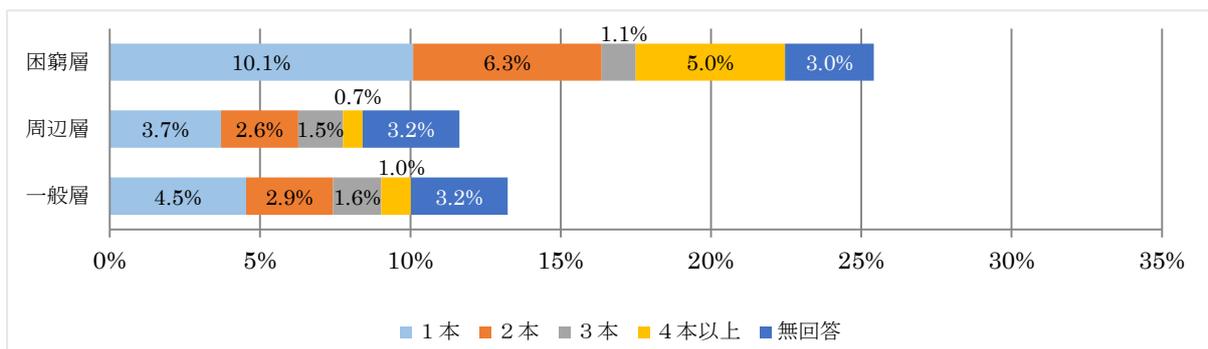


生活困難度別では、全ての年齢層で統計的に有意差が見られた。困窮層と一般層を比較すると、本数に関わらず「むし歯がある」と答えた割合の差は、小学5年生では12.8ポイント、中学2年生では12.5ポイント、16-17歳では8.8ポイントであり、困窮層の方が高い。

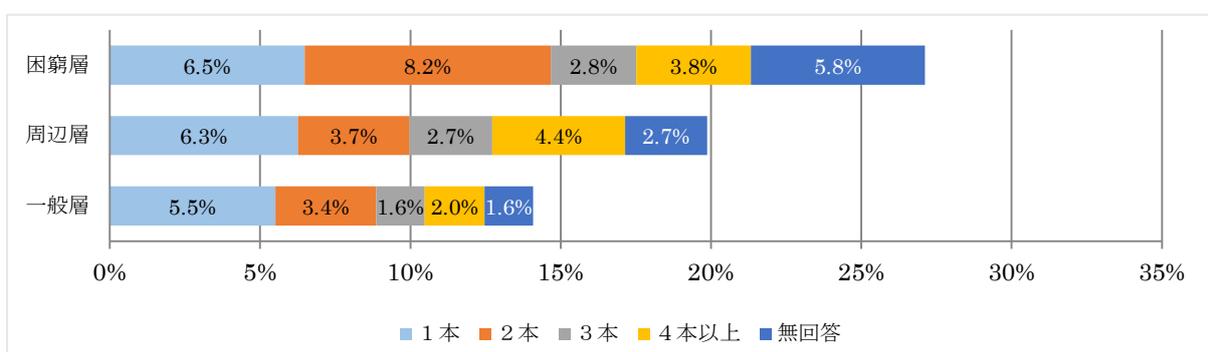
図表 5-1-16 むし歯の本数(治療中も含む)(小学5年生):生活困難度別(\*\*\*)



図表 5-1-17 むし歯の本数(治療中も含む)(中学 2 年生):生活困難度別(\*\*\*)



図表 5-1-18 むし歯の本数(治療中も含む)(16-17 歳):生活困難度別(\*\*\*)

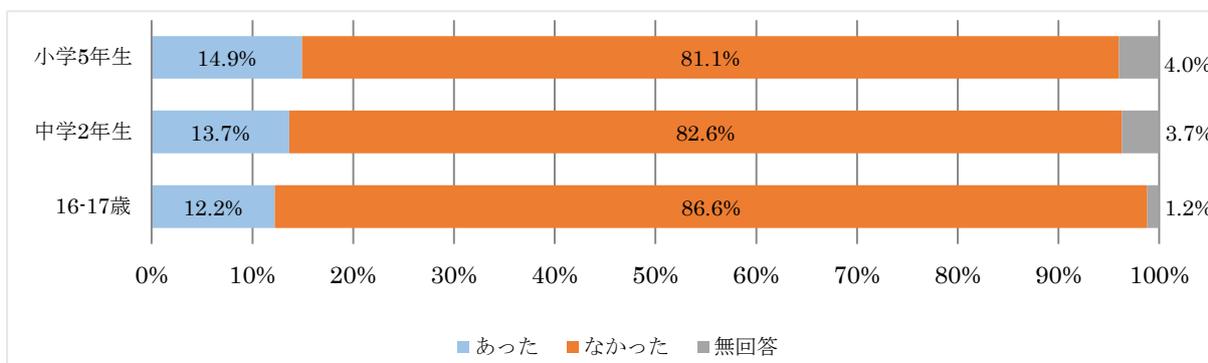


## (2) 医療の受診抑制

### ①受診抑制経験

保護者に対して「過去 1 年間に、お子さんを医療機関で受診させた方がよいと思ったが、実際には受診させなかったことがありますか」と聞いた。小学 5 年生では 14.9%、中学 2 年生では 13.7%、16-17 歳では 12.2%の保護者が受診させなかった経験が「あった」と回答している。

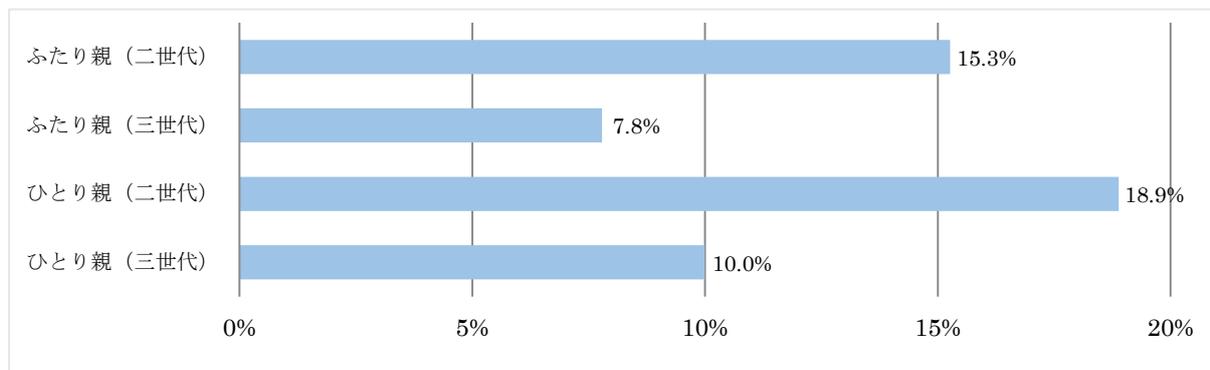
図表 5-1-19 医療の受診抑制経験:年齢層別



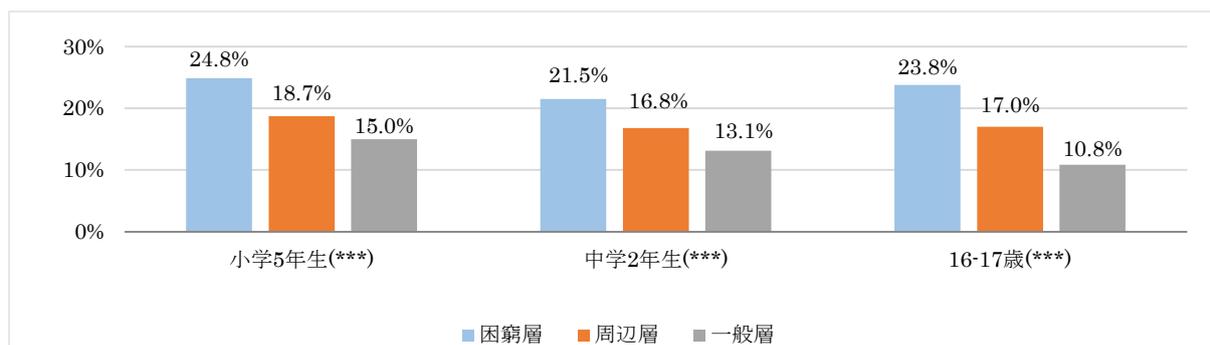
受診抑制経験において世帯タイプ別による統計的に差が有意なのは、小学5年生のみであった。ひとり親世帯、ふたり親世帯ともに二世帯の世帯で受診抑制経験がある割合が高い。

生活困難度別では、どの年齢層においても困窮層がいちばん高く、約2割に受診抑制経験があった。

図表 5-1-20 医療の受診抑制経験(小学5年生):世帯タイプ別(\*\*\*)



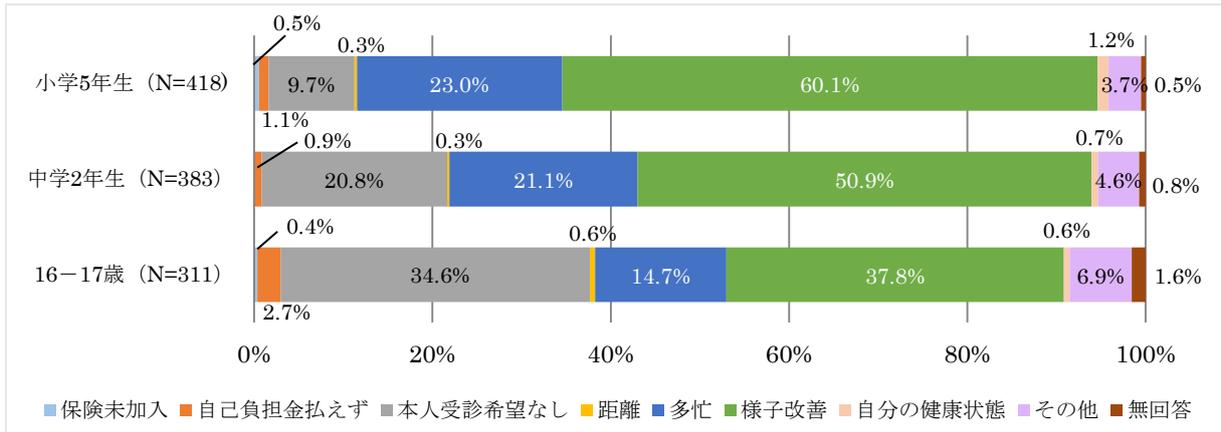
図表 5-1-21 医療の受診抑制経験:生活困難度別



## ②受診抑制理由

子供を受診させなかった経験がある保護者に、その理由を聞いたところ、どの年齢層においても「最初は受診させようと思ったが、子供の様子を見て、受診させなくてもよいと判断したため(様子改善)」、「多忙で、医療機関に連れて行く時間がなかったため(多忙)」、「子供本人が受診しなかったため(本人受診希望なし)」の順に割合が高かった。しかし、「公的医療保険に加入していたが、医療機関で自己負担金を支払うことができないと思ったため(自己負担金払えず)」と回答した保護者(小学5年生1.1%、中学2年生0.9%、16-17歳2.7%)もいる。この傾向は小学5年生、中学2年生と比較して、16-17歳の保護者の割合が高い。本調査で対象となった全ての自治体において、医療費助成制度が15歳まで対象となっていることが理由の一つとして考えられる。

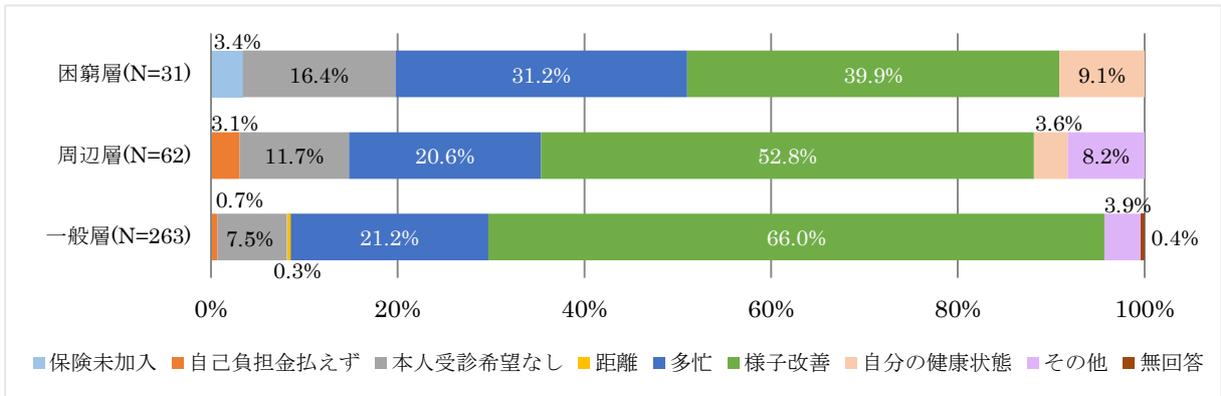
図表 5-1-22 医療の受診抑制理由:年齢層別



生活困難度別で見ると、小学5年生の困窮層の受診抑制理由で最も高いのは「様子改善」で39.9%、次いで「多忙で、医療機関に連れて行く時間がなかったため（多忙）」が31.2%である。また、「自己負担金払えず」は0%である。中学2年生の困窮層では、「多忙」が最も高く33.3%、次いで「本人受診希望なし」が28.6%である。「自己負担金払えず」は最も低く、3.2%である。

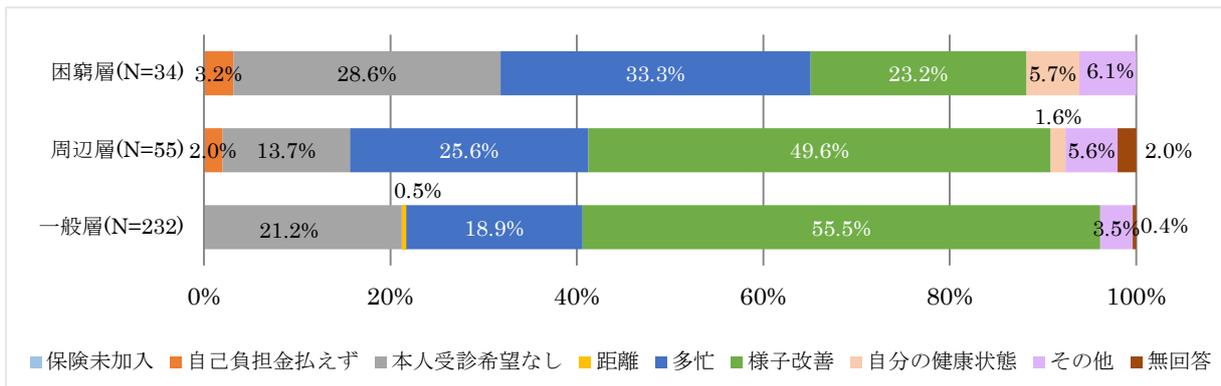
一方、16-17歳の困窮層では「多忙」を理由にあげる割合は低く14.8%であるが、「自己負担金払えず」と答えた保護者が18.8%と他の年齢層と比較して高くなっている。

図表 5-1-23 医療の受診抑制理由(小学5年生):生活困難度別(\*\*\*)

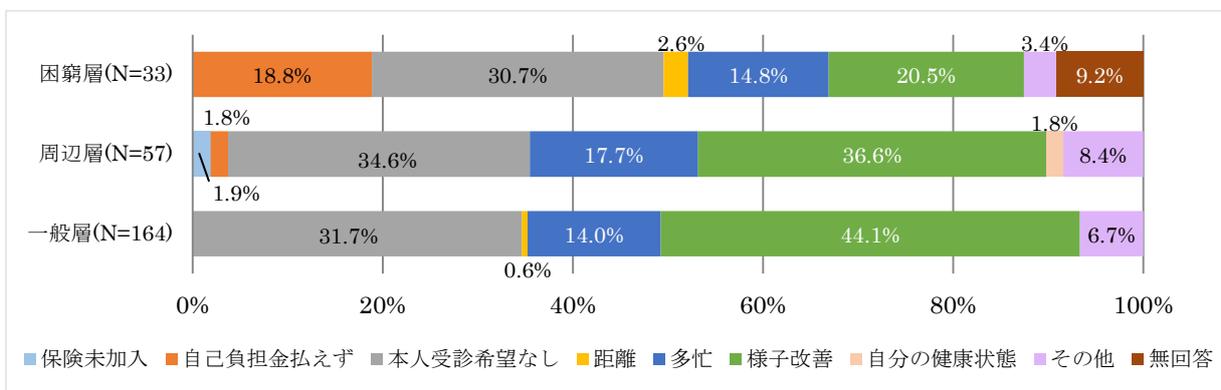


\*サンプル数と度数の合計が異なるのは、クロス集計であることが理由である（以下同じ）。

図表 5-1-24 医療の受診抑制理由(中学 2 年生):生活困難度別(\*\*\*)



図表 5-1-25 医療の受診抑制理由(16-17 歳):生活困難度別(\*\*\*)

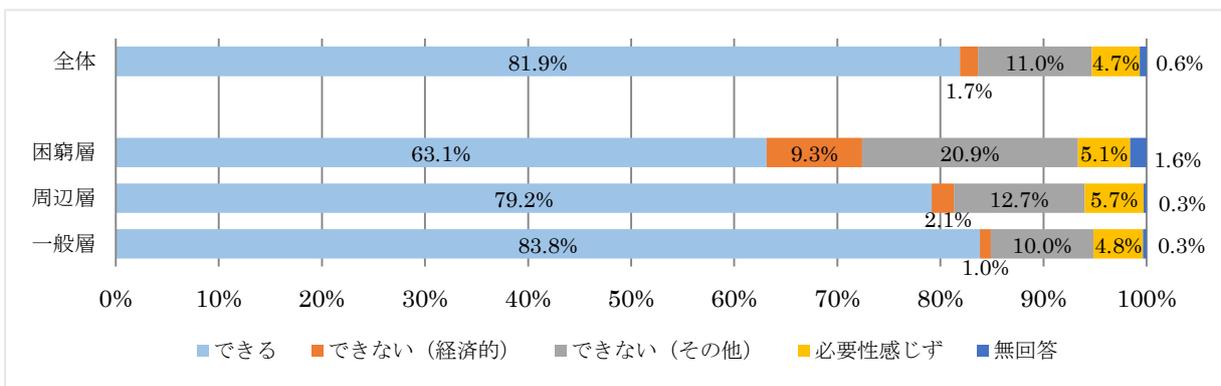


### ③必要な時に医療機関にかかれるか (16-17 歳)

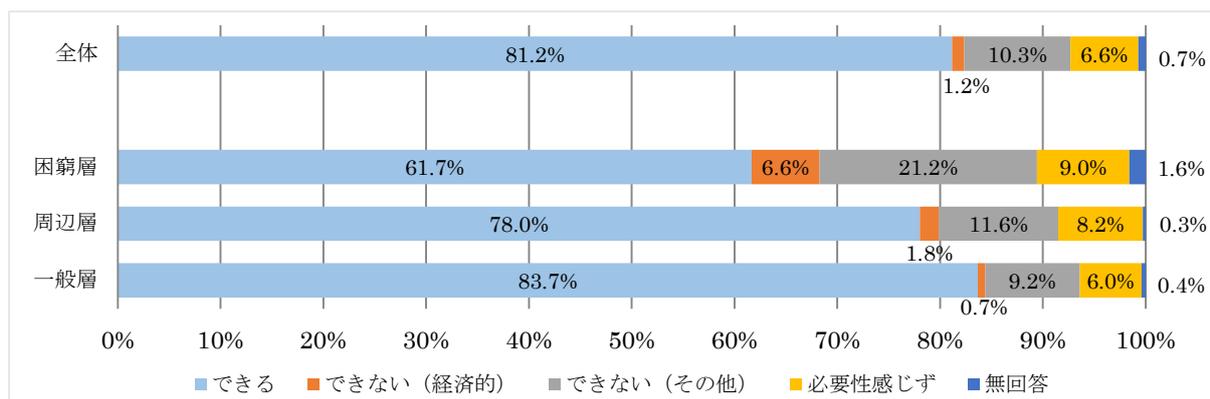
16-17 歳の子供には、「あなたは、自分が必要と思う時、医者にかかることができますか (健診含む)」、「あなたは、自分が必要と思う時に、歯医者にかかることができますか (健診含む)」と聞いた。医者については、「できないことがある (経済的理由により)」と答えたのは全体の 1.7%であったが、生活困難度別で見ると、困窮層の 9.3%が医者にかかることが「できないことがある (経済的に理由により)」と回答している。

歯医者の受診状況においても同様に、全体では 1.2%が経済的に理由により歯医者にかかれなると答えているが、困窮層ではその割合が 6.6%となっている。

図表 5-1-26 自分が必要と思う時に、医者にかかる(16-17 歳):全体、生活困難度別(\*\*\*)



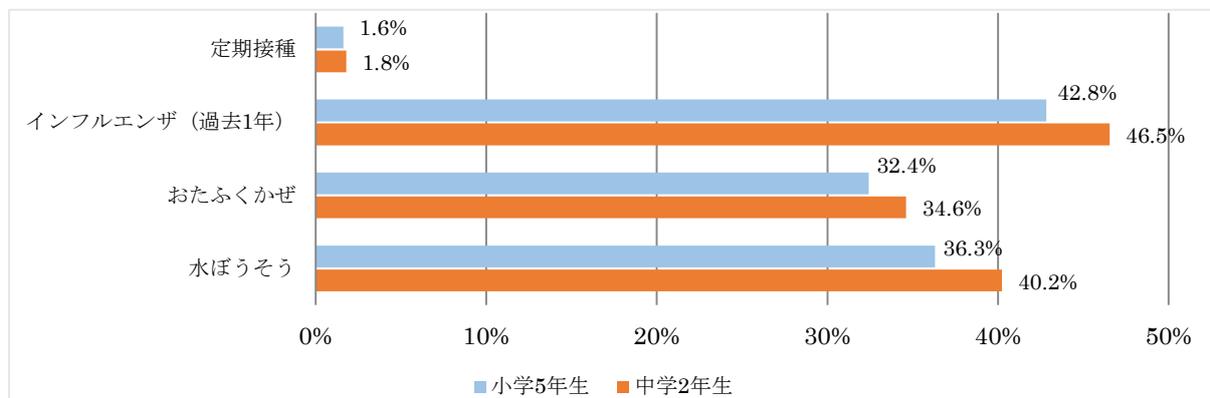
図表 5-1-27 自分が必要と思う時に、歯医者にかかる 16-17 歳：全体、生活困難度別(\*\*\*)



### (3) 予防接種の未接種状況

小学 5 年生、中学 2 年生の保護者に、子供の予防接種の受診状況について聞いた。その結果、「定期接種」では未接種率が低いものの（小学 5 年生では 1.6%、中学 2 年生では 1.8%）、インフルエンザでは未接種率が 4 割を超え、おたふくかぜでは約 3 割、水ぼうそうでは約 4 割であった。

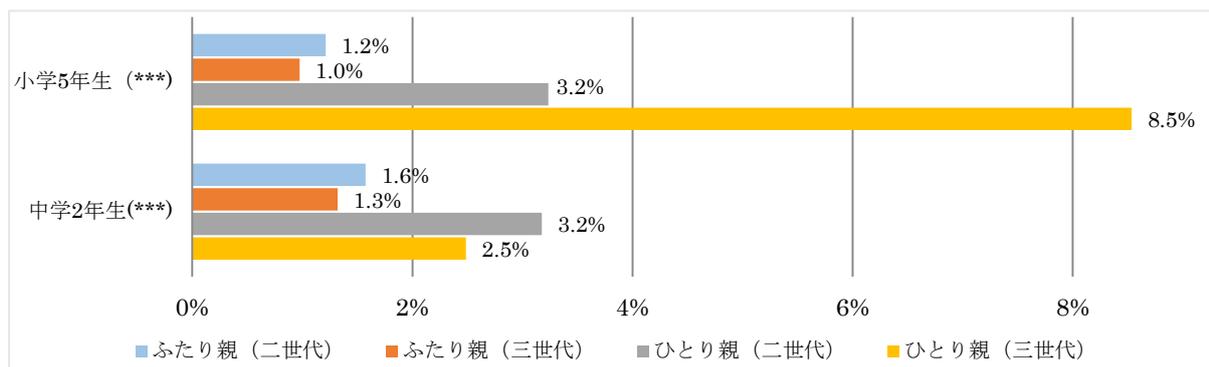
図表 5-1-28 予防接種の未接種状況(小学 5 年生、中学 2 年生)



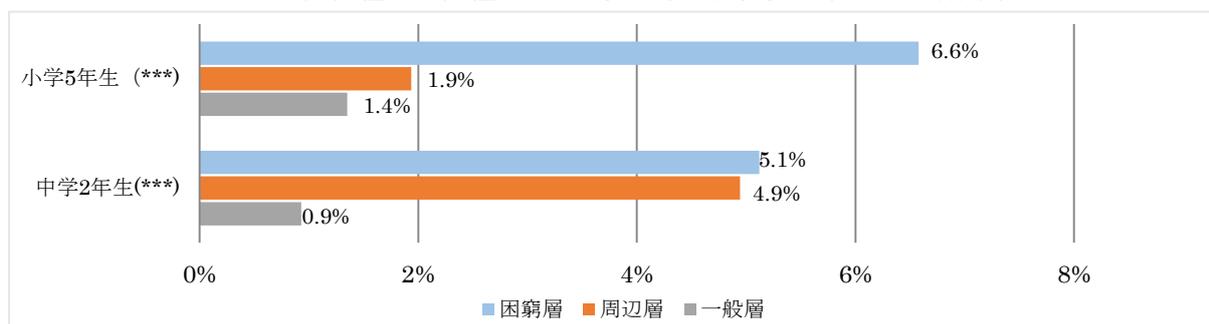
※水ぼうそうは、平成 26 年 10 月より定期予防接種となっている。

定期予防接種は、世帯タイプ別、生活困難度別ともに統計的に有意な差が見られた。未接種の割合がいちばん高いのは、小学 5 年生はひとり親（三世代）世帯の 8.5%、中学 2 年生はひとり親（二世帯）世帯の 3.2%であり、ひとり親世帯で未接種率が高い。また、困窮層の未接種率が高く、小学 5 年生は 6.6%、中学 2 年生で 5.1%である。

図表 5-1-29 定期予防接種の未接種状況(小学5年生、中学2年生):世帯タイプ別

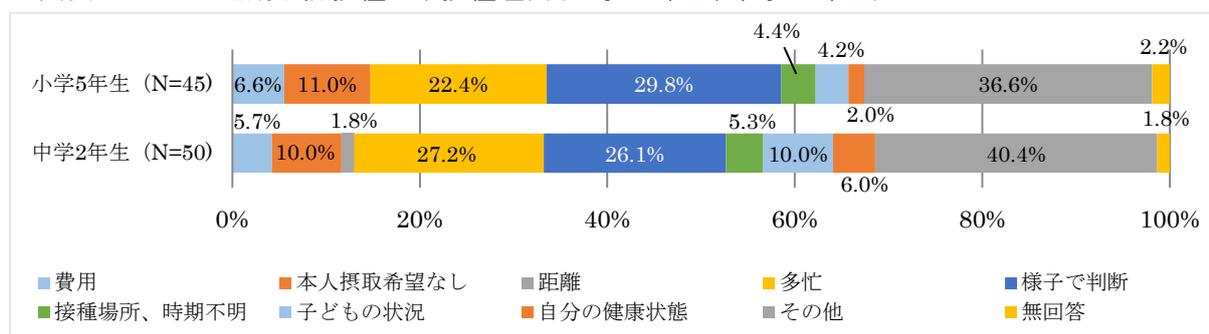


図表 5-1-30 定期予防接種の未接種状況(小学5年生、中学2年生):生活困難度別



定期予防接種の未接種の理由については、「子供の様子を見て、受けさせなくてもよいと判断したため(様子で判断)」(小学5年生 29.8%、中学2年生 26.1%)、「多忙で、医療機関等に連れて行く時間がなかったため(多忙)」(小学5年生 22.4%、中学2年生 27.2%)の割合が高かった。一方で、小学5年生、中学2年生どちらの保護者も、「費用がかかると考えていたため(費用)」(小学5年生 6.6%、中学2年生 5.7%)、「いつどこで受けさせればよいのかよくわからなかったため(接種場所、時期不明)」(小学5年生 4.4%、中学2年生 5.3%)と回答するものが一定割合見られた

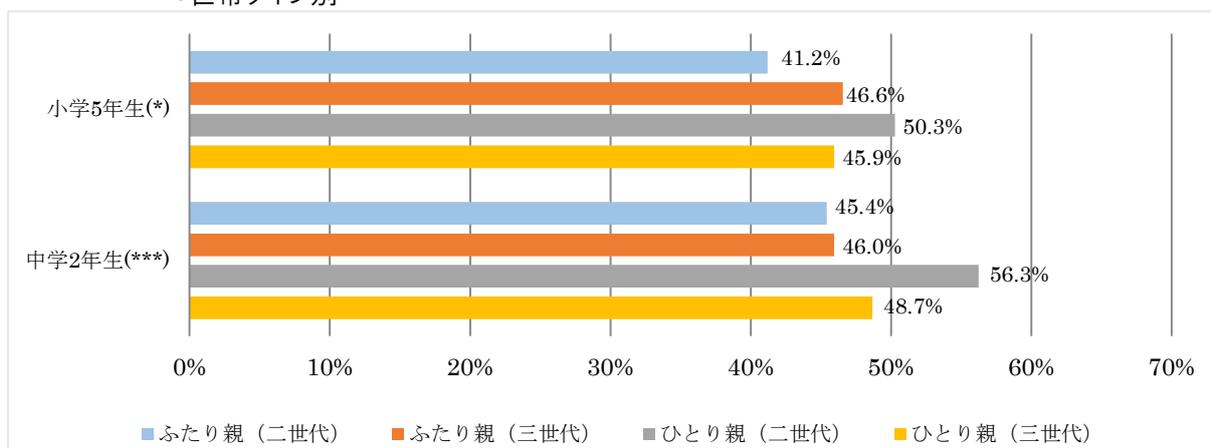
図表 5-1-31 定期予防接種の未接種理由(小学5年生、中学2年生)



任意予防接種の接種状況を見ると、インフルエンザの予防接種は、世帯タイプ別、生活困難度別の両方で統計的に有意な差が見られた。世帯タイプ別では、ひとり親(二世帯)世帯でも高く、5割を超えている。生活困難度別では、困窮層で6割以上が未接種である。

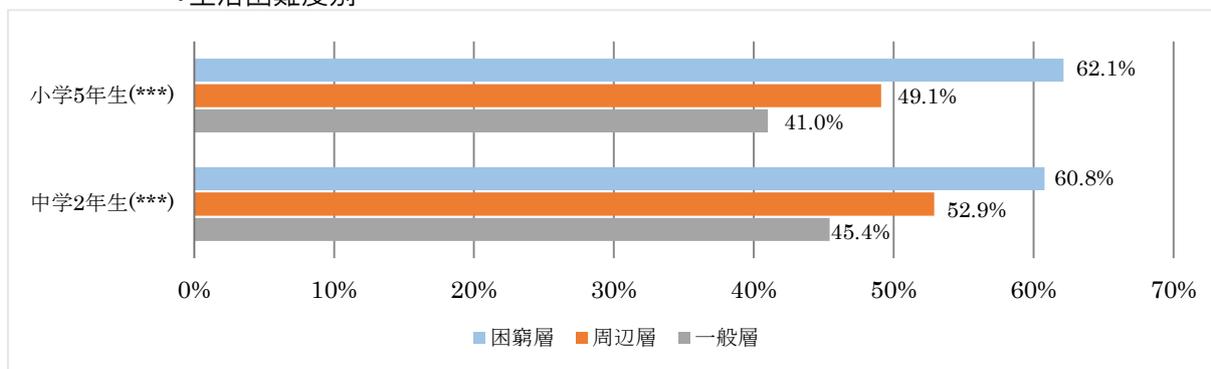
図表 5-1-32 予防接種の未接種状況(インフルエンザ(過去1年))(小学5年生、中学2年生)

:世帯タイプ別



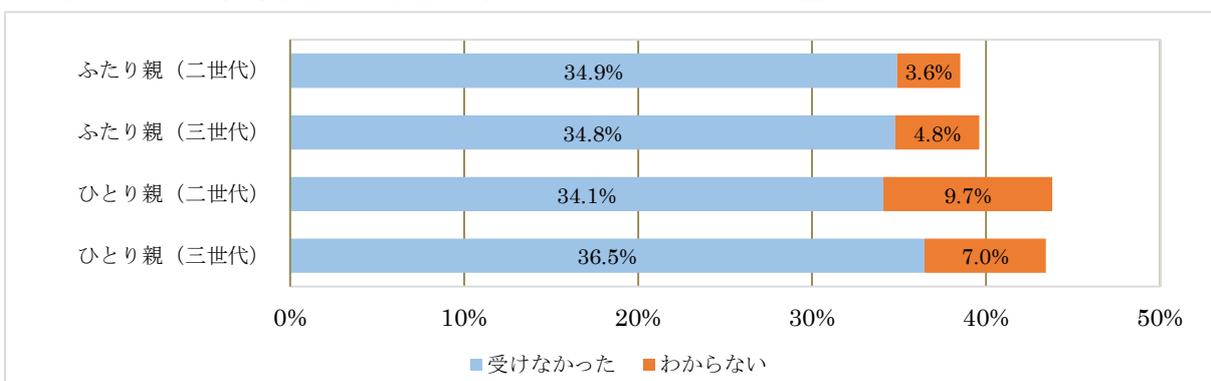
図表 5-1-33 予防接種の未接種状況(インフルエンザ(過去1年))(小学5年生、中学2年生)

:生活困難度別

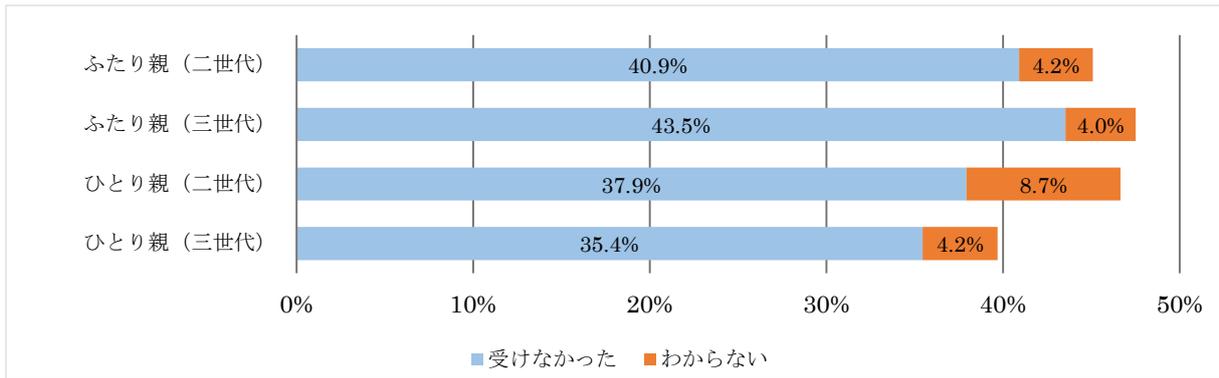


おたふくかぜ、水ぼうそうの未接種率について世帯タイプ別で見たところ、小学5年生では、どちらも統計的に有意な差は見られない。中学2年生では、予防接種の受診状況について「わからない」と回答する割合がひとり親、特にひとり親(二世帯)世帯で高い。おたふくかぜでは9.7%、水ぼうそうでも8.7%の保護者が、「わからない」と回答しており、子供に受けさせたか否かを把握できていない状況にある

図表 5-1-34 予防接種の未接種状況(おたふくかぜ)(中学2年生):世帯タイプ別(\*\*\*)

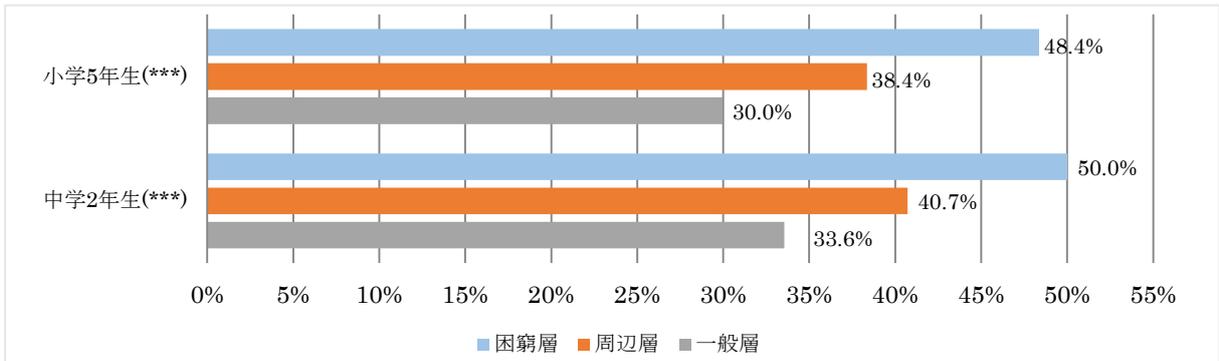


図表 5-1-35 予防接種の未接種状況(水ぼうそう)(中学 2 年生):世帯タイプ別(\*\*)

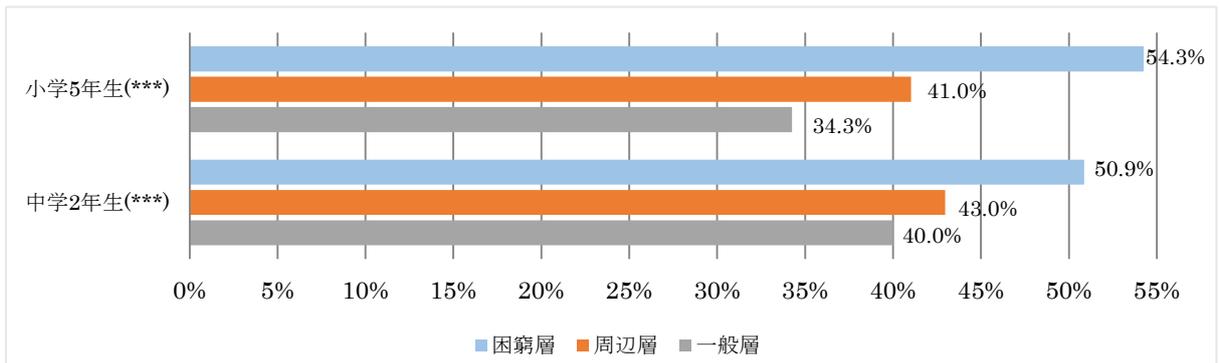


生活困難度別では、おたふくかぜ、水ぼうそうの予防接種についても、「受けなかった」と回答した割合は、一般層では約 3 割から約 4 割であるが、困窮層では約 5 割となっている。

図表 5-1-36 予防接種の未接種状況(おたふくかぜ)(小学 5 年生、中学 2 年生):生活困難度別



図表 5-1-37 予防接種の未接種状況(水ぼうそう)(小学 5 年生、中学 2 年生):生活困難度別



## 2 自己肯定感

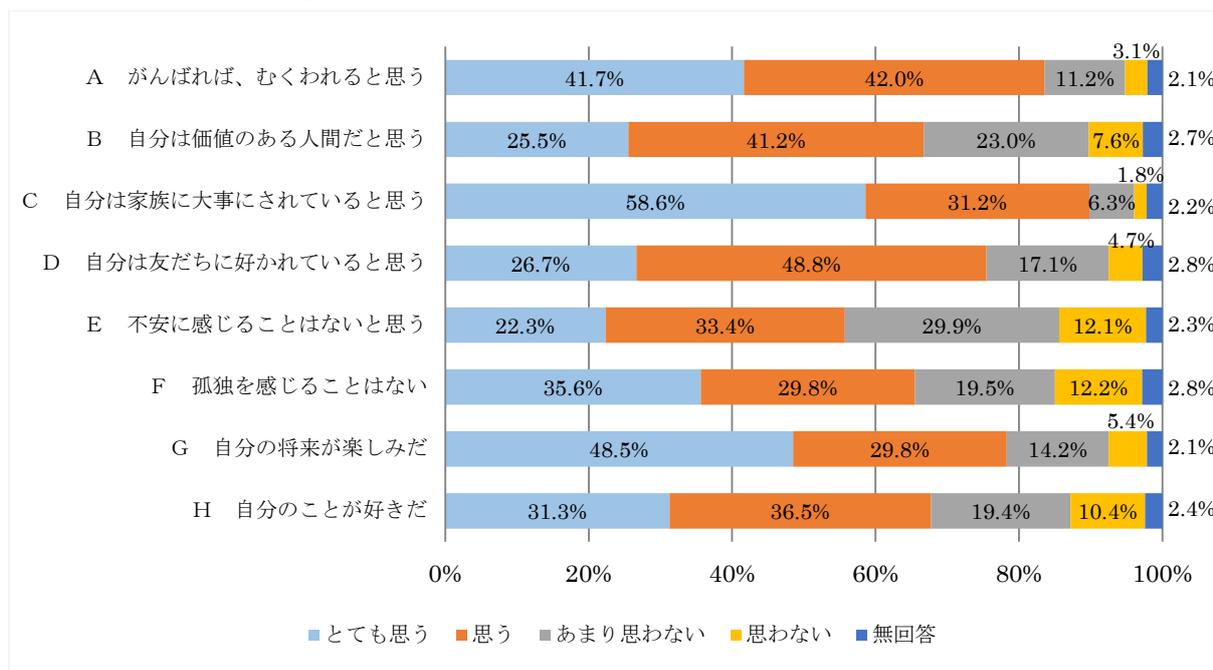
### (1) 自己肯定感

本調査では自己肯定感に関連する8～9つの設問を設けている。小学5年生と中学2年生には図表5-2-1及び図表5-2-2のAからHの8項目、16-17歳の子供はさらに「毎日の生活が楽しい」の項目を加えた9項目について、「とても思う」、「思う」、「あまり思わない」、「思わない」の4段階で最も近いものを選択してもらった。

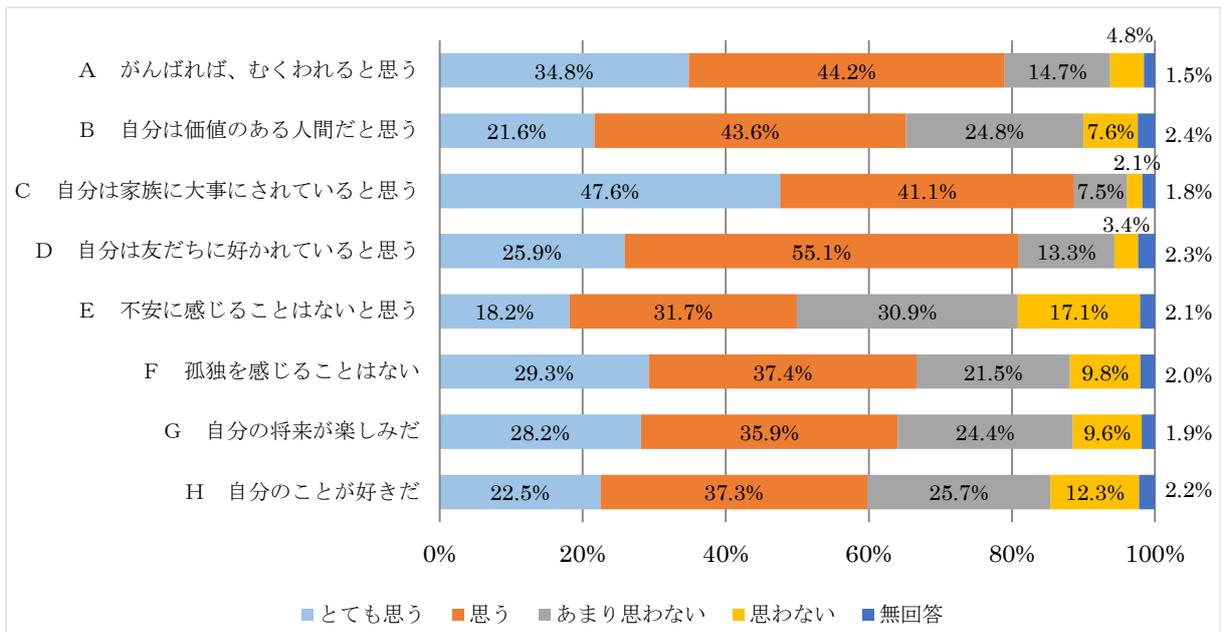
「不安に感じることはないと思う」については、小学5年生の42.0%、中学2年生の48.0%、16-17歳の57.4%が「あまり思わない」、「思わない」と回答しており、多くの子供が何かしらの不安を抱えていることがわかる。また、「孤独を感じることはない」については、小学5年生の31.7%、中学2年生の31.3%、16-17歳の37.0%が、「あまり思わない」、「思わない」（＝孤独を感じる）と回答している。

「自分は価値のある人間だと思う」については、「とても思う」、「思う」は、全ての年齢層で6割を超えているものの、約7%～9%が「思わない」と回答している。また、「自分の将来が楽しみだ」については、小学5年生の5.4%、中学2年生の9.6%、16-17歳の10.2%で「思わない」と回答している。

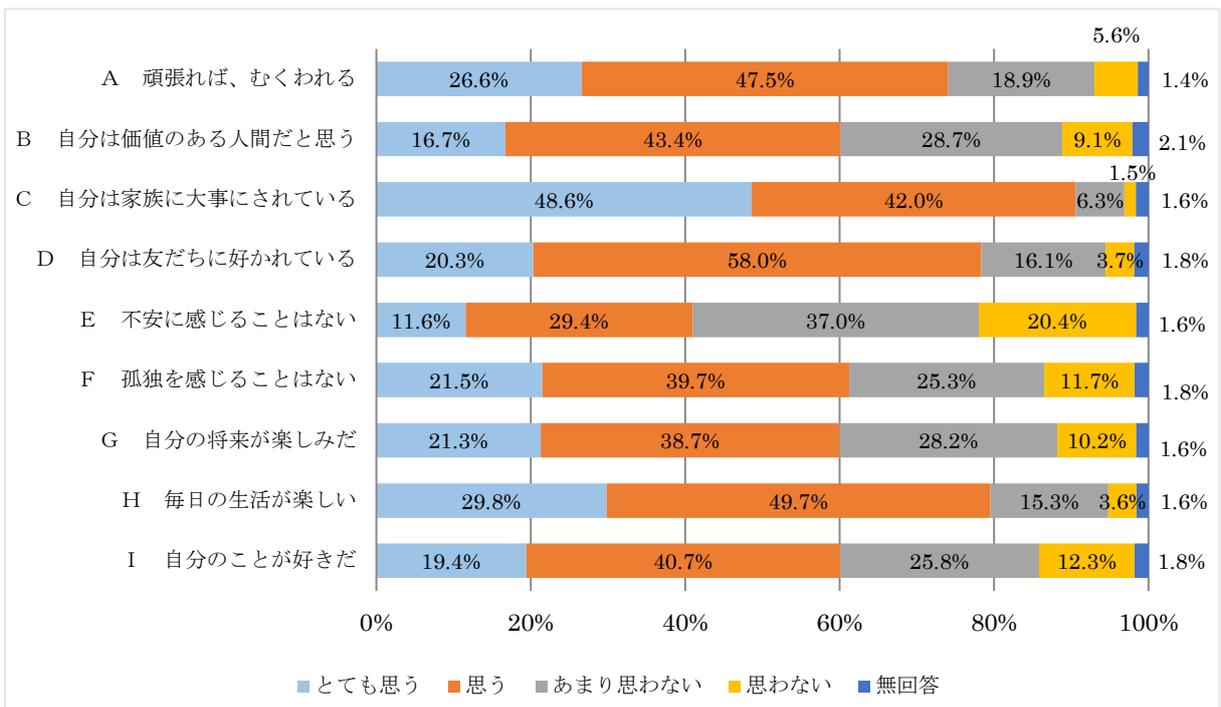
図表 5-2-1 自己肯定感(小学5年生)



図表 5-2-2 自己肯定感(中学 2 年生)

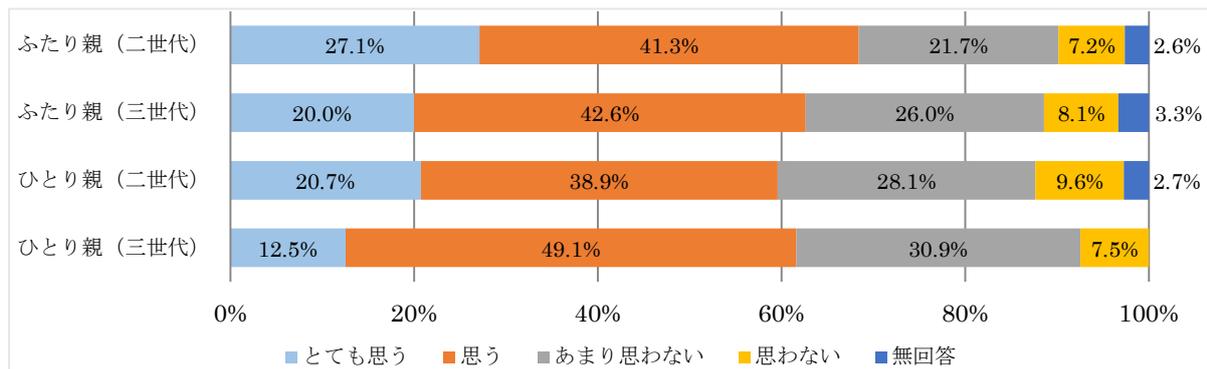


図表 5-2-3 自己肯定感(16-17 歳)

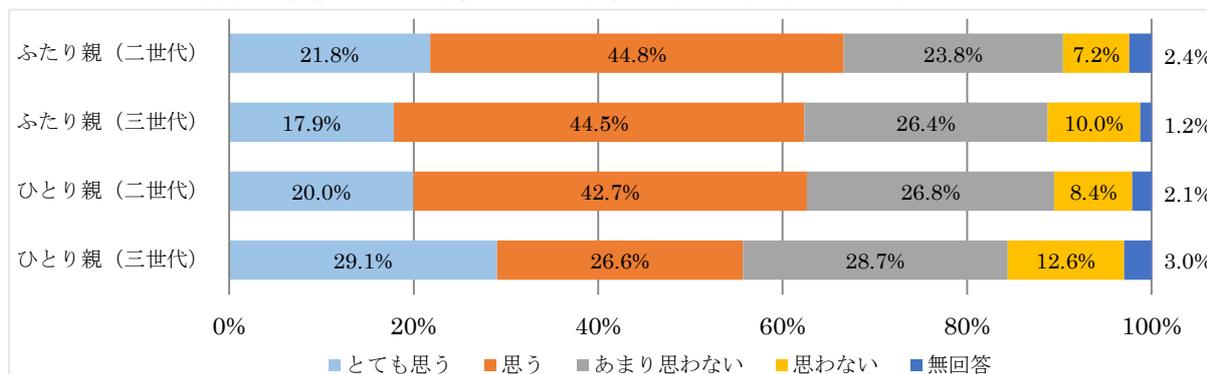


世帯タイプ別に見ると、全ての年齢層で統計的に有意な差が見られた項目は「自分は価値のある人間だと思う」である。「思わない」と回答した割合が最も高かったのは、小学 5 年生ではひとり親（二世帯）世帯の 9.6%、中学 2 年生、16-17 歳ではひとり親（三世帯）世帯で、それぞれ 12.6%、16.0%だった。全体的にひとり親世帯の子供に自分の価値を見出せていない傾向が見られた。

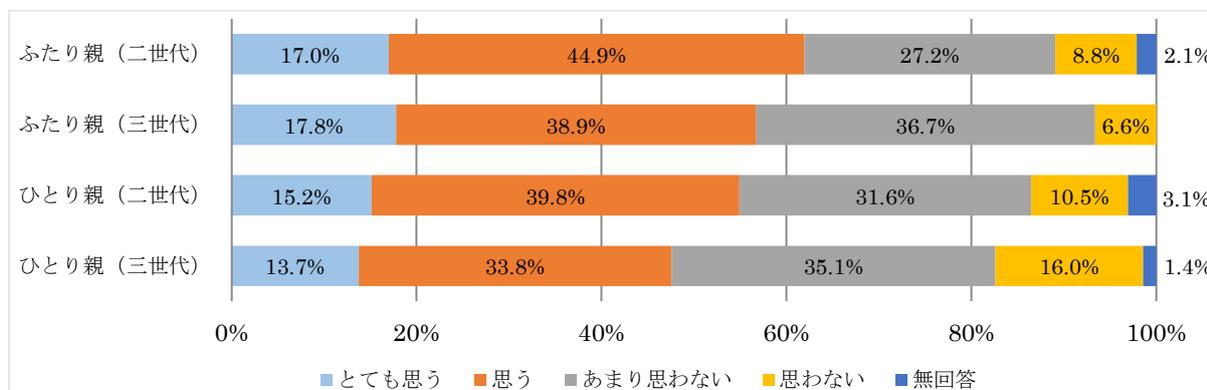
図表 5-2-4 自分は価値のある人間だと思う(小学 5 年生):世帯タイプ別(\*\*\*)



図表 5-2-5 自分は価値のある人間だと思う(中学 2 年生):世帯タイプ別(\*)



図表 5-2-6 自分は価値のある人間だと思う(16-17 歳):世帯タイプ別(\*\*)

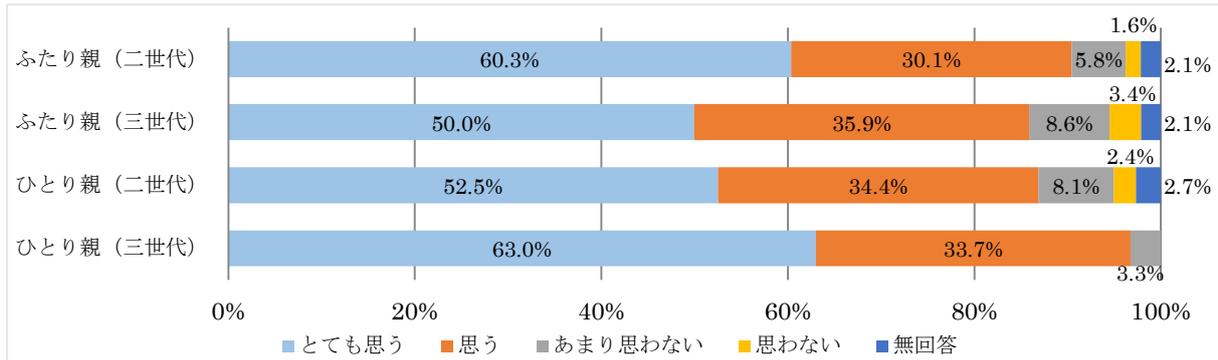


その他の項目では、小学 5 年生、中学 2 年生ともに「自分は家族に大切にされていると思う」の項目に統計的に有意な差が見られた。小学 5 年生で「とてもそう思う」と回答した割合が最も高かったのは、ひとり親 (三世帯) 世帯の子供 (63.0%) である。中学 2 年生も同様の傾向で、「とてもそう思う」と回答した割合が最も高かったのは、ひとり親 (三世帯) 世帯の子供 (55.3%) である。

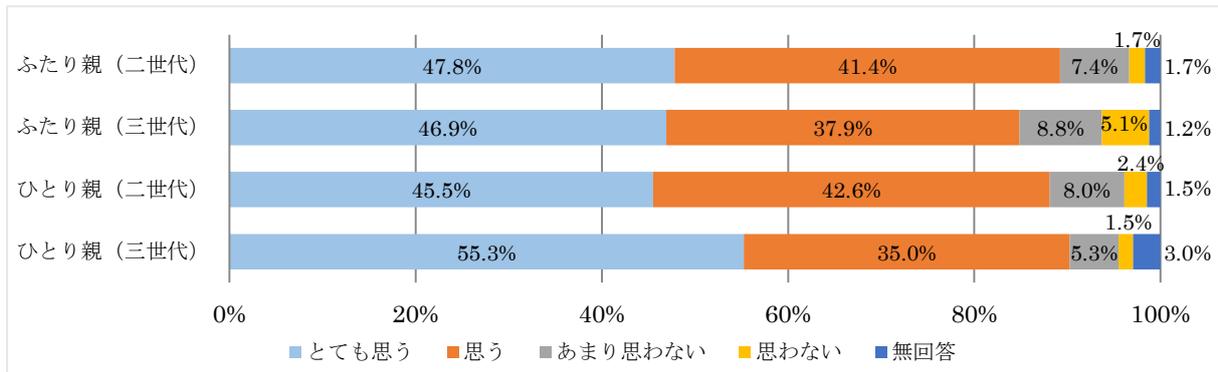
小学 5 年生では、「自分の将来が楽しみだ」の項目でも統計的に有意な差が見られ、「とても思う」と答えた割合が最も低かったのは、ひとり親 (三世帯) 世帯の子供だった (34.7%)。

また、ひとり親 (三世帯) 世帯の子供は、「自分のことが好きだ」の項目に「とても思う」と答えた割合も低く、19.4%である。

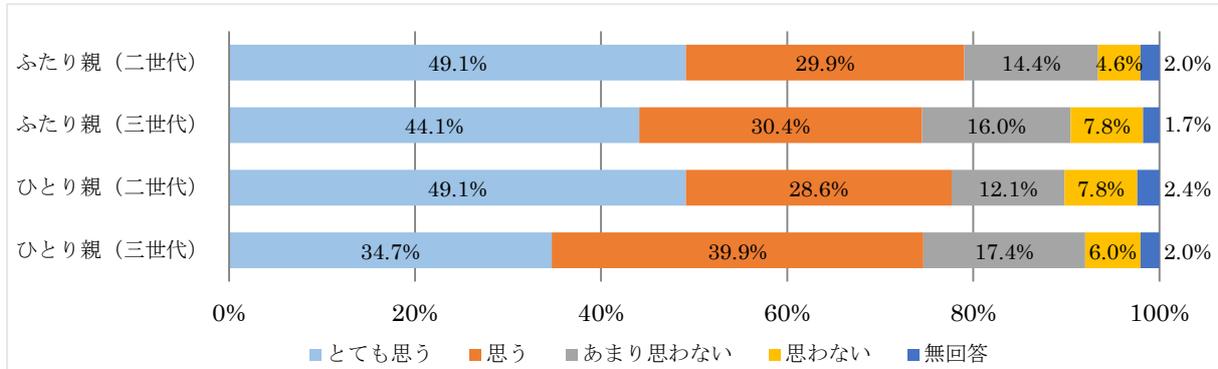
図表 5-2-7 自分は家族に大事にされていると思う(小学 5 年生):世帯タイプ別(\*\*)



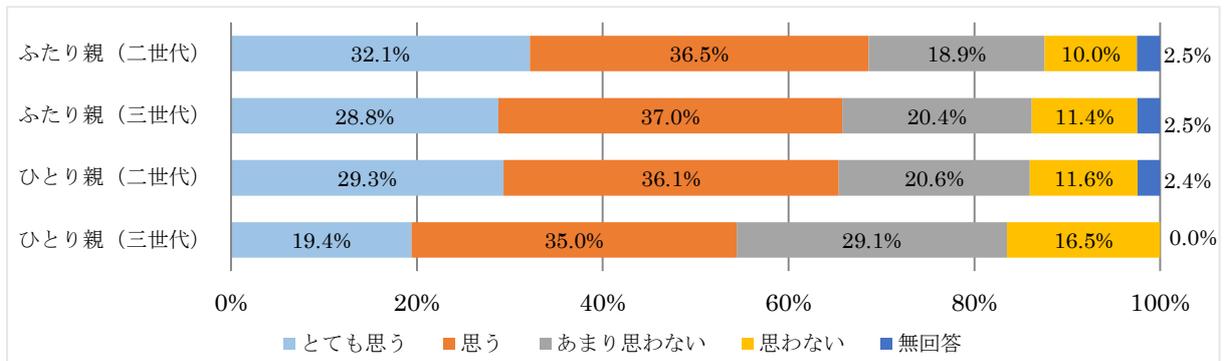
図表 5-2-8 自分は家族に大事にされていると思う(中学 2 年生):世帯タイプ別(\*)



図表 5-2-9 自分の将来が楽しみだ(小学 5 年生):世帯タイプ別(\*)

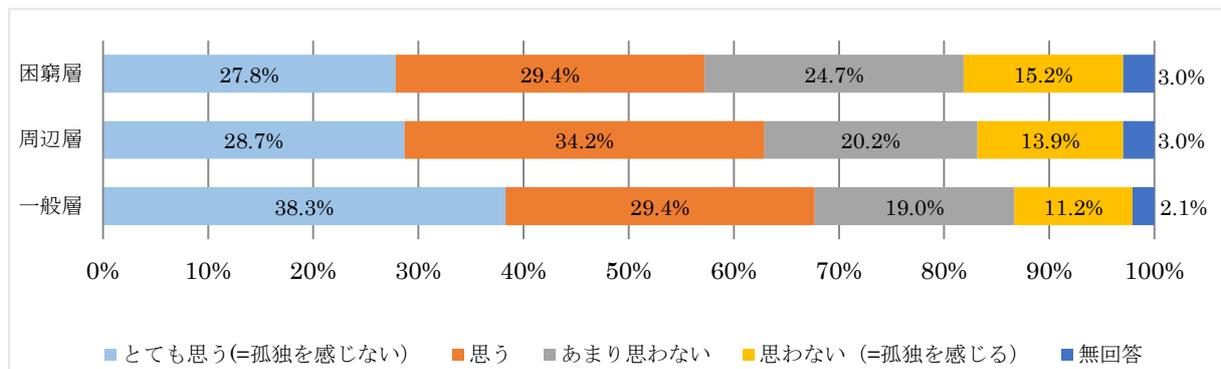


図表 5-2-10 自分のことが好きだ(小学 5 年生):世帯タイプ別(\*)

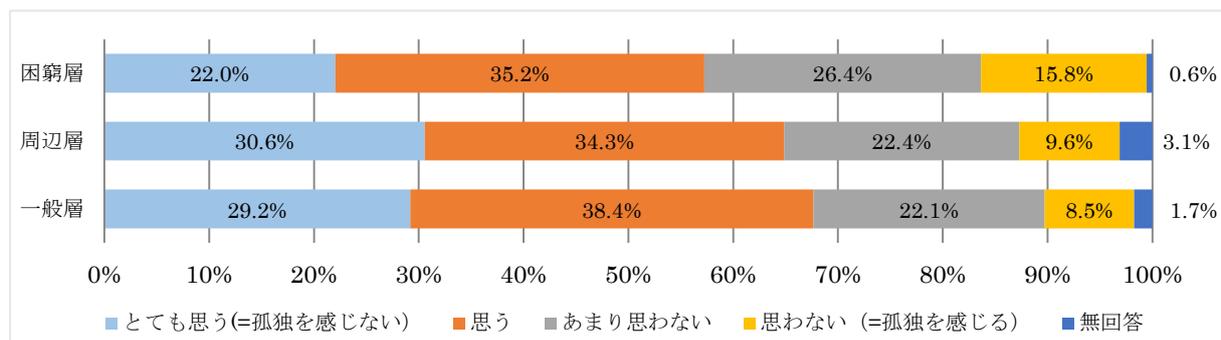


生活困難度別で、全ての年齢層で統計的に有意な差が見られた項目は「孤独を感じることはない」である。困窮層と一般層を比較して「そう思わない」（＝孤独を感じる）と回答した割合の差は、小学5年生は4.0ポイント、中学2年生は7.3ポイント、16-17歳は6.6ポイントであり、どの年齢層でも一般層と比較して、困窮層の子供が孤独感を感じているという結果が見られた。

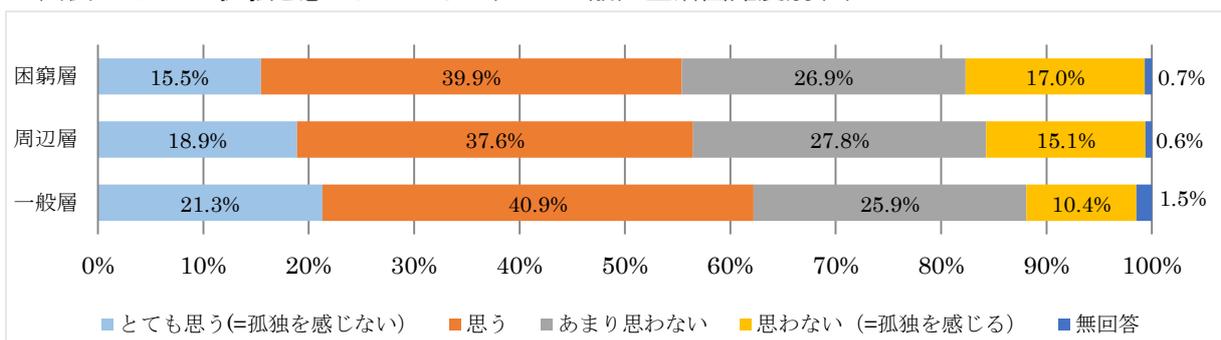
図表 5-2-11 孤独を感じることはない(小学5年生):生活困難度別(\*\*)



図表 5-2-12 孤独を感じることはない(中学2年生):生活困難度別(\*\*)



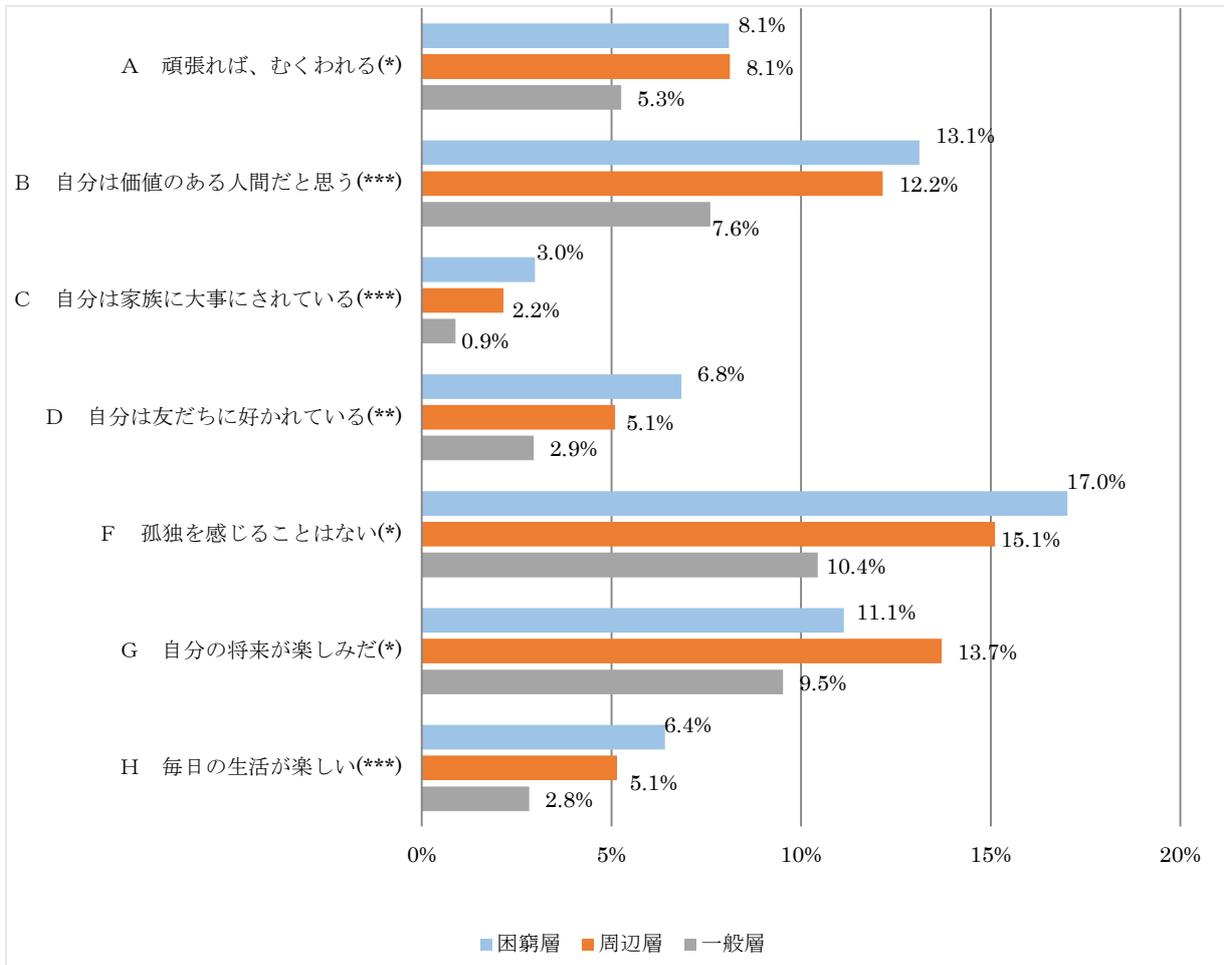
図表 5-2-13 孤独を感じることはない(16-17歳):生活困難度別(\*)



生活困難度別に自己肯定感を見ると、統計的に有意な差が見られる項目は、小学5年生では3項目（「自分は家族に大切にされている」、「孤独を感じることはない」、「自分は価値のある人間だと思う」）、中学2年生では2項目（「自分は価値のある人間だと思う」、「自分は家族に大切にされている」）であるが、16-17歳では「不安を感じることはない」「自分のことが好きだ」以外の7項目で統計的に有意な差が見られ、困窮層では一般層より否定的な回答（「思わない」）をする割合が高くなっている。

図表 5-2-14 自己肯定感(「思わない」と回答した割合)(16-17 歳):生活困難度別

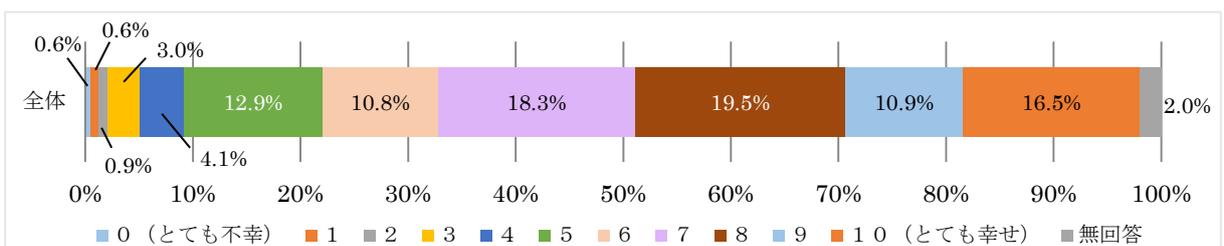
(※統計的に有意な差が見られる項目のみ)



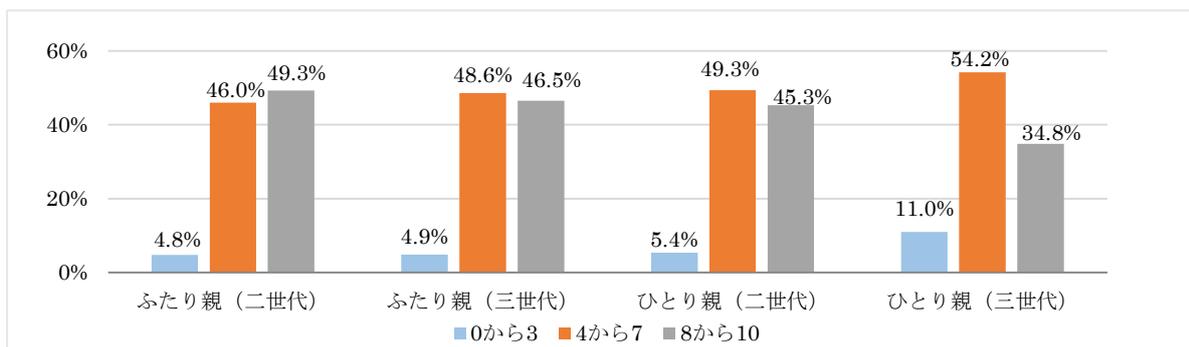
## (2) 16-17 歳の子供の幸福度

16-17 歳の子供に、この 1 年間を振り返っての幸福度を 0 (とても不幸) から 10 (とても幸せ) の 11 段階で聞いたところ、46.9%は幸福度の高い上位 3 段階 (8-10) を選択しているものの、5.1%は下位 4 段階 (0-3) を選択している。世帯タイプ別に見ると、ひとり親 (三世帯) 世帯においては、幸福度が低い (0-3) 子供の割合が他の世帯タイプと比較して高く、最も低いふたり親 (二世帯) 世帯と比較すると、6.2 ポイント高い。また、生活困難度別で見ると、困窮層で幸福度が低い (0-3) 子供の割合が高く (13.8%)、一般層と比較して 9.2 ポイント高い。

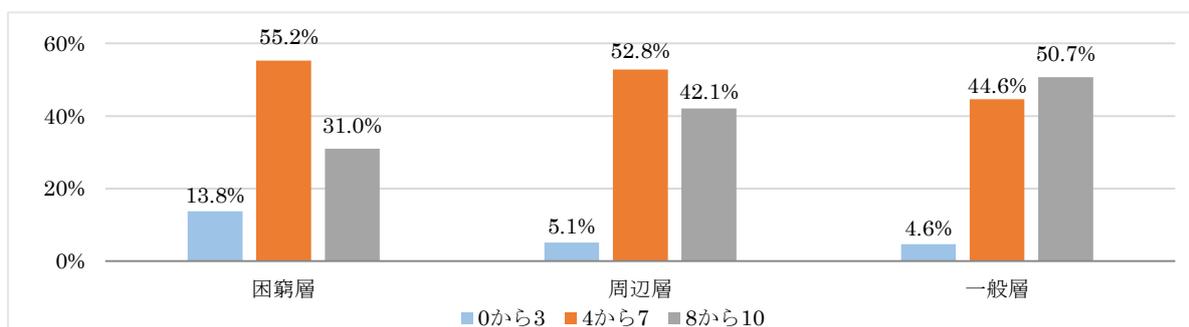
図表 5-2-15 この 1 年間の幸福度(16-17 歳):全体



図表 5-2-16 この1年間の幸福度(16-17歳):世帯タイプ別(\*)



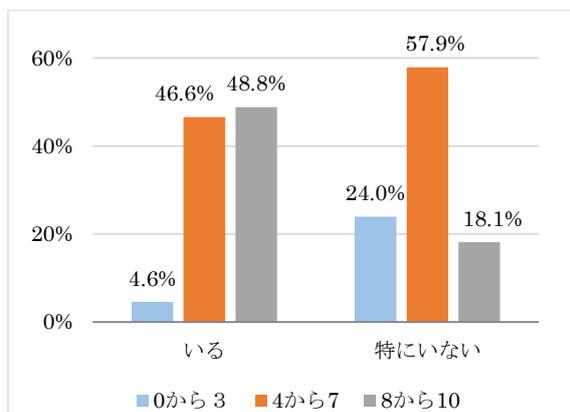
図表 5-2-17 この1年間の幸福度(16-17歳):生活困難別(\*\*\*)



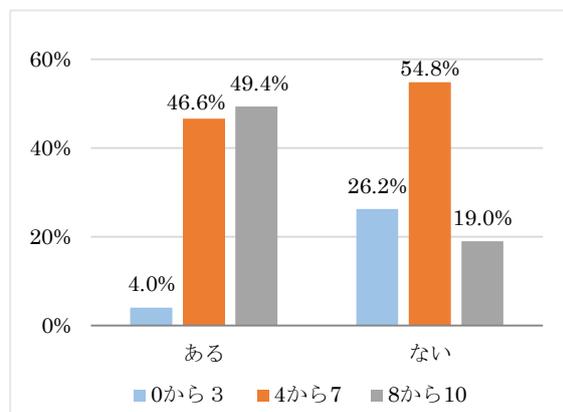
「あなたの一番仲が良い友達、どのような友達ですか」という質問項目に設けられている7つの選択肢のうち「とくに仲の良い友達はいない(特にいらない)」と答えた子供、及び「あなたが一番ほっとできる居場所はどこですか」という質問に「ほっとできる居場所はない(ない)」と答えた子供の幸福度を見た。その結果、「とくに仲の良い友達はいない」と答えた16-17歳の24.0%は、「幸福度が低い(0-3)」と回答しており、「仲の良い友達がいる」と答えた子供で「幸福度が低い(0-3)」割合が4.6%と比較すると高い。また、「ほっとできる居場所はない(ない)」と回答した16-17歳の26.2%は幸福度が低い、「居場所がある」と答えた子供のうち、幸福度が低い割合が4.0%と比較すると高い。

図表 5-2-18 この1年間の幸福度(16-17歳):

仲の良い友達の有無別(\*\*\*)



ほっとできる居場所の有無別(\*\*\*)



### (3) 抑うつ傾向

本調査では、小学5年生、中学2年生の抑うつ傾向を表す指標としてDSRS-C パールソン児童用抑うつ性尺度を、また16-17歳の抑うつ傾向は、K6を採用した。

DSRS-C パールソン児童用抑うつ性尺度は最近1週間の心の状態(18項目)について、子供自身が3段階評価を行うものである。各項目は選択肢に応じてそれぞれ0~2点で指標化され、その合計が16点以上であった場合、抑うつ傾向があると判断される。またK6は、過去30日の間での心の状況(6項目)を指数化、点数によってそれぞれ、「心理的ストレス反応相当(5点以上)」、「気分・不安障害相当(9点以上および10点以上)」、「重症精神障害相当(13点以上)」に分類される。いずれの指数も、全ての項目を回答しているもののみを分析対象とし、それ以外は全て「無回答」とし、後の分析から省かれている。

分析の結果、小学5年生の12.3%、中学2年生の20.1%にてDSRS-C パールソン児童用抑うつ性尺度にて判断される抑うつ傾向が見られた。また、K6指標によって16-17歳の26.3%が、「気分・不安障害相当」、11.1%が「重症精神障害相当」と判断された。

図表 5-2-19 小学5年生、中学2年生の抑うつ傾向(DSRS-C パールソン児童用抑うつ性尺度)

抑うつ傾向	小学5年生		中学2年生	
	度数	割合	度数	割合
なし	2,287	80.2%	2,124	73.5%
あり	355	12.3%	589	20.1%
無回答	258	7.6%	240	6.4%

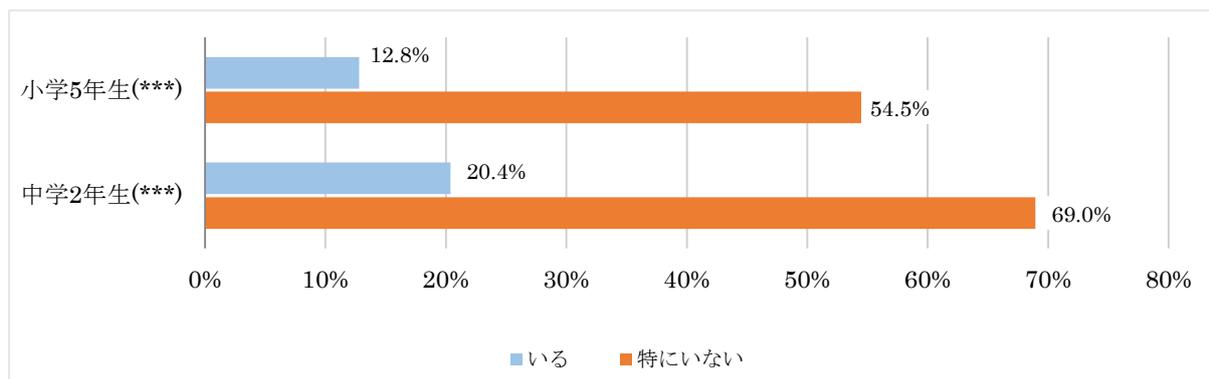
図表 5-2-20 16-17歳の抑うつ傾向(K6)

抑うつ傾向(あり)	度数	割合
心理的ストレス反応相当	1,234	47.47%
9+ : 気分・不安障害相当	687	26.3%
10+ : 気分・不安障害相当	595	22.7%
重症精神障害相当	295	11.1%

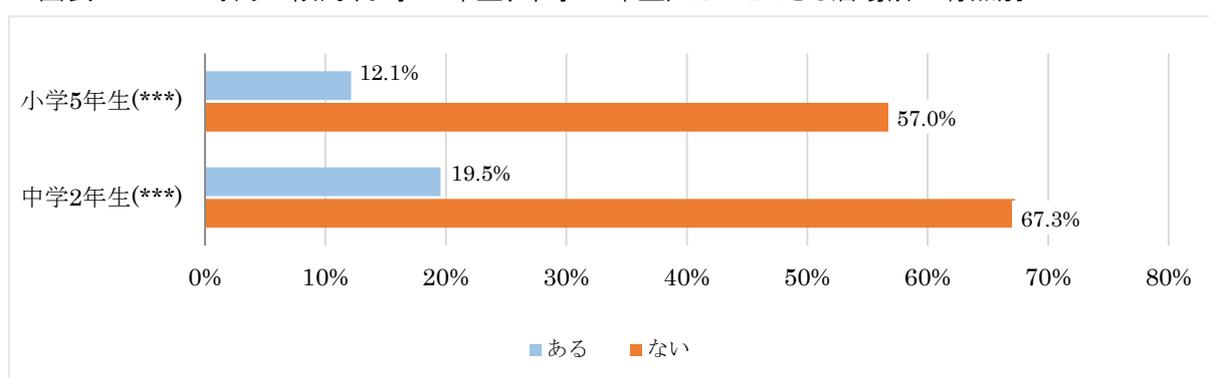
#### ①小学5年生、中学2年生の抑うつ傾向

世帯タイプ別に見ると、小学5年生と中学2年生のどちらも抑うつ傾向に統計的に有意な差は見られなかった。その一方で、「とくに仲の良い友達はいない(特にいない)」と答えた子供及び「ほっとできる居場所はない(ない)」と答えた子供の抑うつ傾向を見ると、「とくに仲の良い友達はいない(特にいない)」と答えた小学5年生の54.5%、中学2年生の69.0%に抑うつ傾向が見られた。さらに、「ほっとできる居場所はない(ない)」と回答した小学5年生の57.0%、中学2年生の67.3%に抑うつ傾向が見られる。

図表 5-2-21 抑うつ傾向(小学 5 年生、中学 2 年生):仲の良い友達の有無別

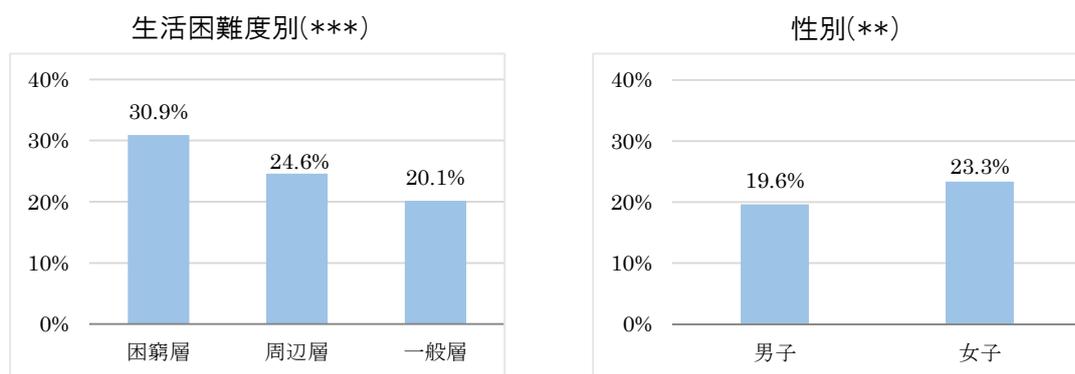


図表 5-2-22 抑うつ傾向(小学 5 年生、中学 2 年生):ほっとできる居場所の有無別



生活困難度別において、小学 5 年生では統計的に有意な差が見られない。しかし、中学 2 年生では困窮層の 30.9%に抑うつ傾向が見られ、一般層との差は 10.8 ポイントである。また、中学 2 年生は性別でも統計的に有意な差が見られ、女子の方が男子より抑うつ傾向が高かった。

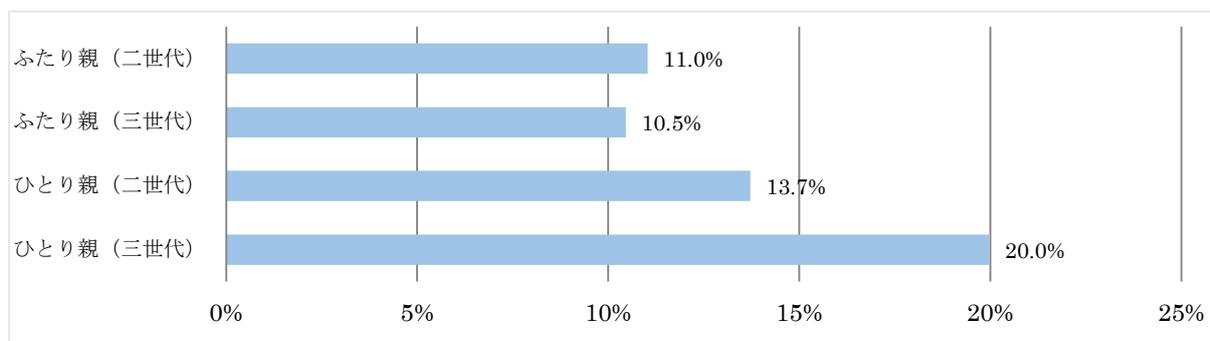
図表 5-2-23 抑うつ傾向(中学 2 年生)



## ②16-17 歳の抑うつ傾向

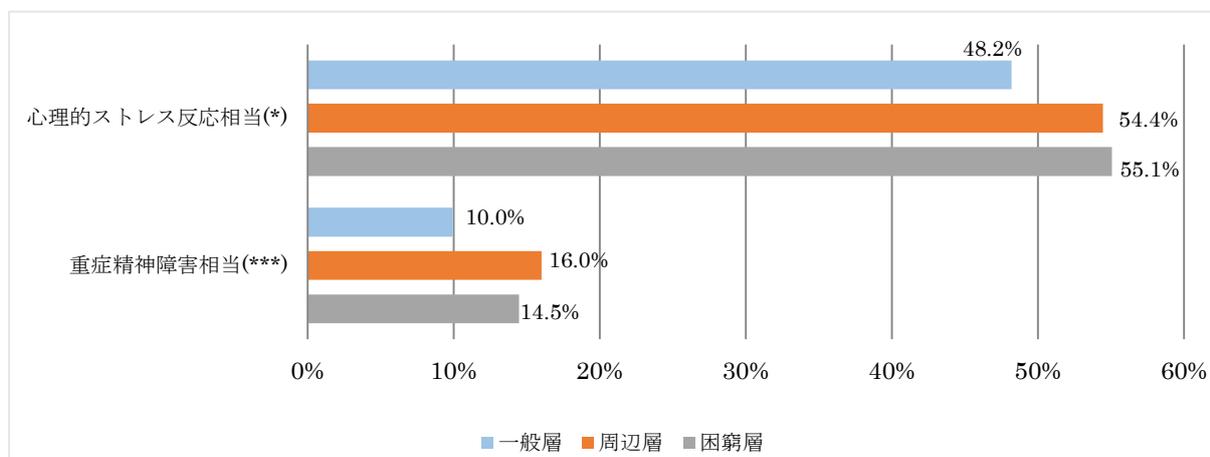
16-17 歳の抑うつ傾向については、世帯タイプ別では「重症精神障害相当」にあたる子供の割合に統計的に有意な差が見られた。ひとり親（三世代）世帯が最も高く 20.0%となっており、ふたり親（三世代）世帯の約 2 倍である。

図表 5-2-24 抑うつ傾向(重症精神障害相当)(16-17 歳):世帯タイプ別(\*)



生活困難度別では、比較的軽微な心理的ストレス反応相当に当たる子供と、重症精神障害相当に当たる子供で統計的に有意な差が見られた。いずれも一般層よりも困窮層で抑うつ傾向にある子供の割合が高く、心理的ストレス反応相当に当たる子供が 55.1%、重症精神障害相当に当たる子供が 14.5%であった。

図表 5-2-25 抑うつ傾向(16-17 歳):生活困難度別

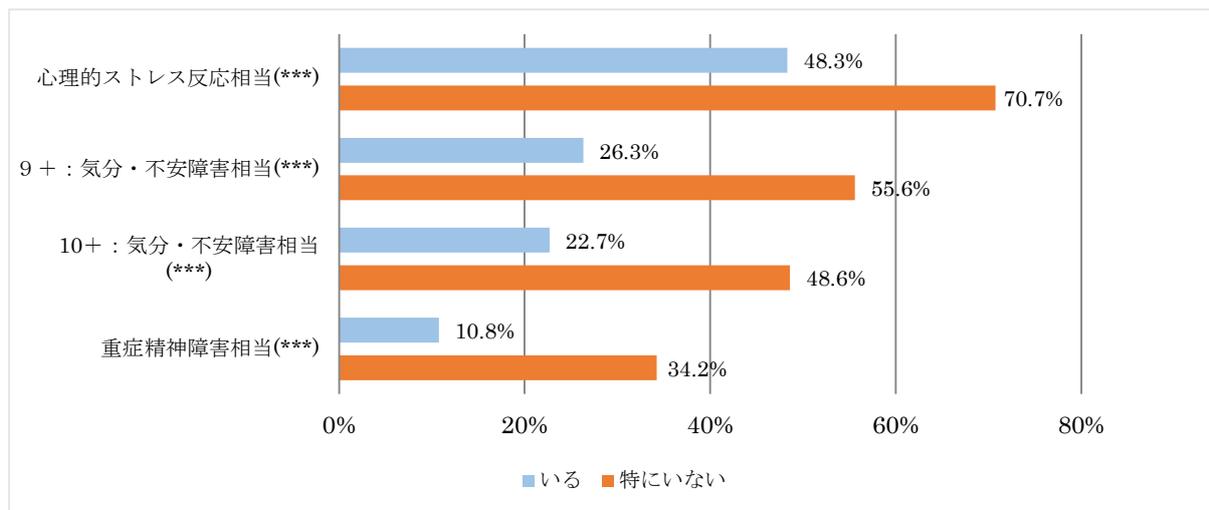


仲の良い友達の有無、ほっとできる居場所の有無と、16-17 歳の子供の精神的ストレスについては、関連性が強い。仲の良い友達が「特にいない」と答えた子供の 70.7%が心理的ストレス反応相当に当たり、34.2%が重症精神障害相当である。これは仲の良い友達が「いる」と答えた子供のうち重症精神障害相当にあたる子供が 10.8%であることと比較しても、差は大きい。

ほっとできる居場所については、その差はさらに大きく、「ない」と回答した子供の 80.2%が心理的ストレス反応相当で、38.8%が重症精神障害相当である。

小中学生と同様、16-17 歳の子供にとっても友達や居場所は重要であることがわかった。

図表 5-2-26 抑うつ傾向(16-17 歳):一番仲の良い友達の有無別



図表 5-2-27 抑うつ傾向(16-17 歳):一番ほっとできる居場所の有無別

